

研 究 紀 要

第 30 号

目 次

はじめに 1

所長 三 上 盛 一

《研究報告》

1 大学生とカタル！キャリアサポート形成事業 4
～中学校における「Jr. キャリサポ」の実践を通して～

育成研修課 指導主事 對 馬 明

2 生涯学習・社会教育関係職員研修講座の在り方について 23
～変遷とアンケート調査から今後を考える～

教育活動支援課 社会教育主事 花 田 一 仁

はじめに

平成30年7月に、第1回北海道・北東北4道県生涯学習センター等研修交流会を当センターで開催しました。各センターの施設紹介、今年度の主な事業紹介、そして各センターから提出された事項の協議・情報交換と質疑応答、来年度の研修交流会の持ち方などについて話し合いました。開催して感じたことは、各センターの設立経緯や管理運営方法などの違いはあるものの、それぞれの悩みや苦勞している点、今日的課題への取組方向などは共通する点が多いということでした。そして何より良かったことは、同じ社会教育関係職員として顔の見える仲間となり、お互い切磋琢磨して資質向上を図り、生涯学習・社会教育の振興のために“ガンバロウ”という強い気持ちを共感できたことです。

本県では、平成30年12月に、平成31年度から5年間を計画期間とする「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦～支え合い、共に生きる～」を策定しました。この中で、「教育・人づくり分野（生活創造社会の礎）」では「あおもりの未来をつくる人財の育成」「あおもりの今をつくる人財の育成」「あおもりの活力をつくる文化・スポーツの振興」を政策の柱に据えて取り組むこととしています。今後、生涯学習・社会教育分野の取組もこの施策の柱に沿って展開することになります。

今回で第30号の節目を迎える研究紀要は、これまで県基本計画・県教育振興基本計画に基づき実施された当センターの施策・事業等に関する30年間にわたる調査研究の蓄積でもあります。この研究成果が少しでも市町村や関係機関・団体等の方々のお役に立てればと願うところです。

今回の研究テーマは、11年目を迎えた高大連携キャリアサポートの中で初めて中学生を対象に実施した「大学生とカタル！キャリアサポート形成事業～Jr.キャリサポ～」の報告と、当センターの中核講座である「生涯学習・社会教育関係職員研修講座の在り方について」を報告するものです。

皆さまの忌憚のない御意見・御叱正をいただきますようお願いいたします。

最後に、調査研究に当たり御協力いただきました関係機関・関係各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

青森県総合社会教育センター
所長 三上 盛一

研 究 報 告

大学生とカタル！キャリアサポート形成事業

～中学校における「J r. キャリサポ」の実践を通して～

育成研修課 指導主事 對馬 明

要 旨

「大学生とカタル！キャリアサポート形成事業」は、青森県教育庁生涯学習課が、平成 19 年度に「未来を切り拓く『逞しい高校生』育成事業」の一部として試行し、平成 20 年度から「高大連携キャリア形成支援事業」として実施、平成 22 年度からは「高大連携キャリアサポート推進事業」として実施してきた事業であり、平成 24 年度から同事業名で青森県総合社会教育センターが実施主体となり、継続してきた 11 年目を迎えた事業である。

今年度から、新たに実施対象生徒に中学生を加え「大学生とカタル！キャリアサポート形成事業」（以下「キャリサポ事業」という。）とし、高等学校におけるワークショップを「キャリサポ」、中学校におけるワークショップを「J r. キャリサポ」と称して実施している。

本稿は、事業企画の経過、実施対象生徒に中学生を新たに加えた経緯とその事業実践に向けた取組状況、成果と課題について整理するとともに、今後の展望について考察したものである。

キーワード：キャリア教育，人財育成，青少年教育，中学生

目 次

I	はじめに	5
II	事業構築の経緯	5
III	実践に向けた取組	9
IV	大学生への研修	9
V	ワークショップ実践	12
VI	事後アンケート	16
VII	考察	20
VIII	おわりに	20

I はじめに

平成 29 年 3 月に告示された中学校学習指導要領の改訂の経緯において、文部科学省は「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される」と示している。

また、こうした変化の一つとして、人工知能（AI）の飛躍的な進化を挙げており、「人工知能が自ら知識を概念的に理解し、思考し始めているとも言われ、雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすのではないかと予測も示されている。このことは同時に、人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識につながっている」と示している。

さらに、「このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」と示している。

ここで中学生の状況に注目してみると、中学生は特に多感な時期でもあり、心の問題を多く抱えていることも少なくない。また、厚生労働省が平成 30 年度版「自殺対策白書」で示したデータによると、特に「夏休み明け初日は、1 年の中でも 18 歳以下の自殺者数が突出して多く、その割合は、なんと他の日の 2.6 倍」となっている。多くの学校で夏休みが終わり、2 学期初日「学校が始まる」

ことが子供にどんな負担を与えるのかについて、白書では、夏休み明けのこの時期は「生活環境が大きく変わり、プレッシャーや精神的動揺が生じやすい」と分析している。

このような状況を踏まえ、「キャリアサポ」が過去の実施高等学校でその効果が評価され、実施高等学校数も増加していることから、これまでの高等学校での事業内容を活用して、中学生を対象とした「J r. キャリサポ」を実施することで悩みを抱える中学生が 2 学期より充実した学校生活を送る一助となるのではないかとの思いから、中学校での事業を実施することとした。

本稿では、事業企画の経過、実施対象生徒に中学生を新たに加えた経緯とその事業実践に向けた取組状況、成果と課題、今後の展望についてまとめることとする。

II 事業構築の経緯

1 高大連携キャリアサポート推進事業 平成 29 年度

・実施に向けた取組及び準備・公開ワークショップにおける管内社会教育主事・指導主事を対象としたアンケート調査の実施

平成 29 年度は、高等学校での「キャリアサポ」は過去最多の 25 校で実施することとなった。このうち 3 校の公開ワークショップの際、平成 30 年度からの「J r. キャリサポ」実施予定地区（東青地区、中南地区、三八地区（以下「3 地区」という。））の高等学校における「キャリアサポ」を管内社会教育主事・指導主事に視察していただき、中学校でも実施可能であるかの是非について率直な御意見をアンケート形式で回答していただいた。

＜公開ワークショップ実施高等学校＞

東青地区 青森県立青森西高等学校
平成 29 年 8 月 30 日実施

中南地区 青森県立弘前中央高等学校
平成 29 年 9 月 8 日実施

三八地区 青森県立八戸西高等学校
平成 29 年 9 月 6 日実施

アンケート項目及び回答については、以下の4項目である。

問1 今回の公開ワークショップをご覧になった感想をお書き下さい。

問2 現在は、高大連携でキャリアサポート推進事業を実施していますが、今後中学校での実施を検討しています。

中大連携でのキャリアサポートワークショップは可能でしょうか。

問3 2の設問で難しいと回答した方にお伺いします。どのような点を改善すると実施することができますか。

問4 実施するとしたらどの学年、どの時期に実施するのが望ましいですか。

回答で、特筆される点としては、視察された6名の社会教育主事・指導主事のうち、5名の社会教育主事・指導主事が中学校でのキャリアサポートワークショップは教育上有効であり、実施可能であるとしている点が挙げられる。また、実施対象に適する学年は、2学年という回答が最も多く、実施時期も夏休み明け（8月下旬）から9月1週目までの実施が有効であるとの回答を得ることができた。

この結果を基に、青森県総合社会教育センター（以下「当センター」という。）で検討した結果、次年度以降の3年間（平成30年度～32年度）「パイロット事業」として実施することとし、ワークショップの名称を「Jr. キャリサポ」とした。

平成30年度は、東青地区で実施することとし、実施中学校の選定については、東青教育事務所及び青森市教育委員会と連携・調整に当たった。

(参考資料)

平成 29 年度キャリアポ実施高等学校一覧

No.	月	日	曜	高校	対象生徒	参加大学生	手法
1	6	10	土	県立青森北高校	1 学年 (6 クラス 240 人)	69 名	CBS
2		17	土	県立黒石高校	1 学年 (4 クラス 159 人)	52 名	CBS
3	7	1	土	青森山田高校	1・2 学年 (2 クラス 62 人)	39 名	CBS
4		8	土	東奥義塾高校	1 学年 (2 クラス 59 人)	33 名	CBS
5	8	22	火	県立三戸高校	2 学年 (2 クラス 41 人)	26 名	RSB
6		23	水	県立田子高校	1・2 学年 (2 クラス 37 人)	28 名	TKJ
7		25	金	県立七戸高校	1 学年 (4 クラス 135 人)	44 名	CBS
8		28	月	県立金木高校	1 学年 (2 クラス 47 人)	24 名	TKJ
9		30	水	県立青森西高校※	1 学年 (6 クラス 236 人)	68 名	RSB
10	9	1	金	県立三沢商業高校	2 学年 (4 クラス 160 人)	42 名	TKJ
11		2	土	県立青森南高校	1 学年 (6 クラス 242 人)	54 名	CBS
12		4	月	県立田名部高校	1 学年 (5 クラス 201 人)	48 名	RSB
13		6	水	県立八戸西高校※	1 学年 (6 クラス 200 人)	54 名	CBS
14		8	金	県立弘前中央高校※	1 学年 (6 クラス 240 人)	56 名	CBS
15		11	月	県立大湊高校川内校舎	1・2 学年 (2 クラス 26 人)	18 名	TKJ
16		12	火	県立五所川原農林高校	2 学年 (4 クラス 139 人)	52 名	RSB
17		14	木	県立青森商業高校	2 学年 (6 クラス 239 人)	57 名	CBS
18	11	4	土	県立浪岡高校	1 学年 (2 クラス 57 人)	29 名	TKJ
19		11	土	県立弘前南高校	1 学年 (6 クラス 242 人)	63 名	CBS
20		18	土	八戸工業大学第二高校	1 学年 (9 クラス 268 人)	69 名	CBS
21		25	土	青森明の星高校	1 学年 (6 クラス 199 人)	51 名	CBS
22	3	2	金	県立五戸高校	1 学年 (2 クラス 44 人)	18 名	TKJ
23		2	金	県立野辺地高校	1 学年 (3 クラス 88 人)	30 名	CBS
24		5	月	県立青森中央高校	1 学年 (5 クラス 197 人)	49 名	CBS
25		5	月	県立青森北高校今別校舎	2 学年 (1 クラス 10 人)	9 名	CBS
					103 クラス 3,568 人	1,082 名	

※公開ワークショップ実施校：県立青森西高校，県立八戸西高校，県立弘前中央高校

高校生・大学生のやる気に火を灯して10周年！ ～高大連携キャリアサポート推進事業～

- 高校生の「やる気」や「意欲」を引き出し、夢に向かって主体的に行動できる人財を育成するために、大学生が高校生の将来をともに考えるワークショップ「キャリアサポ」を開催しています。

今年で10年目を迎える「キャリアサポ」は、高校生の夢や具体的な目標設定、部活動等日常生活の悩み解決の糸口を見つけ出すためのワークショップです。そこで活動する大学生は、コミュニケーション、ファシリテーション等の研修を受講し、自身のスキルアップを行っています。今年度は県内25の高等学校にて「キャリアサポ」を展開中です。



大学生研修の様子



緊張をほぐすアイスブレイク

「キャリアサポ」では、高校生が自分のこれからについて、大学生と共に考えます。大学生は、研修で学んだ相手が心を開く円滑な人間関係づくりを実践しながら、コミュニケーション能力を高めていきます。この活動には、県内の大学・短大・専門学校等から延べ1,198名（昨年度実績）が参加しています。これら多くの大学生の力を合わせ、「キャリアサポ」が成り立っています。

- 春に4校で実施したワークショップでは、緊張の中でも大学生の奮闘が伝わり、終了時の高校生の目の輝きはワークショップ開始時とは見違えるようでした。

高校の先生方からは「生徒たちは楽しそうに生き生きと活動できていた。」「大学生が積極的に『自分』のことを話していたので、生徒も『自分』の内にあるものを出すことができていた。」「生徒の普段見せない表情や様子を見ることができた。実施して良かった。」等の感想がありました。



大学生によるカタリ

- 参加した高校生からも、満足感いっぱいの感想が届いています。
「自分の将来の夢について話したら、迷っていた部分が少し無くなりました。」「自分の内面にある本当に好きなことを見つけられました。夢に向かって頑張りたいと思います。」「初対面で緊張したけど、大学生の皆さんが引っ張ってくれて



車座になったの目標設定

楽しく過ごせました。」「カタリでは、大学生の話を聞いて、自分と少し似ているなと思いました。後悔しないように自分で考える・決めるということ、苦手ででも少しずつ実践していきたいです。自分でやりたいことも改めて考えることができて、良かったです。」等の感想がありました。

このように、「キャリアサポ」は県教育委員会、大学生、高校が力を合わせ、高校生のキャリア形成を支援しています。

高校生・大学生のやる気に火を灯して10周年!

高大連携キャリアサポート推進事業

県教育委員会では、高校生の「やる気」や「意欲」を引き出し、夢に向かって主体的に行動できる人財を育成するために、大学生が高校生の将来をともに考えるワークショップ「キャリアサポ」を実施しています。平成20年にスタートした「キャリアサポ」は、高校生の夢や具体的な目標設定、部活動や日常生活の悩み解決の糸口を見つけ出すためのワークショップを行っており、今年度は、県内25の高校で展開中です。昨年度までの通算で、高校生およそ25,000名、大学・短大・専門学校等からの学生延べ7,400名超が参加し、活動内容にも高い評価をいただいております。

また、大学選択必修科目となるなど、大学との連携も強固なものになってきています。「キャリアサポ」では、高校生は自分のこれからについて大学生とともに考え、一方、大学生は高校生と円滑なコミュニケーションを取りながらワークショップを進めます。

ワークショップでは、緊張の中にも大学生の熱意が伝わり、高校生は目を輝かせ、目標への第一歩を踏み出しており、このように「キャリアサポ」は、県教育委員会、大学生、高校生が力を合わせ、高校生のキャリア形成を支援しています。



車座になったのワークショップ

Ⅲ 実践に向けた取組

1 大学生とカタリ！キャリアサポート形成事業 平成 30 年度

(1) 実施中学校決定に向けて

新年度を迎え、再度、青森市教育委員会と協議した結果、当センターが直接、中学校へ依頼することとなった。

当センターで依頼先を検討した結果、当センターからも近く、事業趣旨を理解していただいた、青森市立荒川中学校(以下「荒川中学校」という。)より実施引き受け承諾の連絡をいただいた。

その時点で合意されたワークショップの内容は以下のとおりである。

日時 平成 30 年 8 月 31 日 (金)

時間 午後の時間帯

開催時間 100 分

対象学年 全学年 6 クラス, 150 名
縦割りグループでの実施

担当窓口 教務主任

(2) 中学校担当者との事前打合せ

担当である教務主任との事前打合せは月 1 回程度実施することとし、具体的な内容を詰めながら、5 月から開催日の週まで、計 6 度ほど訪問させていただいた。中学校側でも、教職員に対しては夏季休業期間中に職員会議及び研修会を実施し、夏季休業明けには、全生徒に対して事前指導するなど学校全体で準備していただいた。

(3) 担当大学生チーフとの事前訪問

ワークショップ実施に当たり、実施日の 1 ヶ月前 (7 月 31 日) に、大学生のまとめ役 (以下「大学生チーフ」という。) と育成研修課担当職員の 2 名で、中学校側の担当窓口である教務主任を訪問し、打合せを行った。打合せの際には、打合せシートによる内容確認及び企画内容、大学生が披露する体験談 (以下「カタリ」という。) の内容の確認、会場、控室等の確認等を行った。特に重視している生徒のグループ分け等については、事前の職員間での調整もあり、スムーズな確認がなされた。

Ⅳ 大学生への研修

1 中学校対応研修

(1) 実施日程及び実施内容

「J r. キャリサポ」実施に当たり、平成 30 年度年間事業実施計画に中学校対応研修を年間 8 日設定し、3 地区での研修会を実施することとした。

<実施日と実施内容、実施会場>

6/ 2 中学校対応研修①, ② 青森

6/ 3 中学校対応研修①, ② 弘前

7/21 中学校対応研修③, ④ 青森

7/22 中学校対応研修③, ④ 弘前

7/28 中学校対応研修①, ② 八戸

7/29 中学校対応研修③, ④ 八戸

2/23※中学校対応研修①, ② 青森

2/24※中学校対応研修③, ④ 青森

※次年度 (平成 31 年度) 実施に向けた研修会

* 青森: 当センター

弘前: 弘前大学

八戸: 八戸学院大学

「J r. キャリサポ」に参加する全ての大学生 (以下「クルー」という。) は、中学校対応研修①及び④に参加することを必須とした。また、中学校対応研修②及び③については、クルーのうち、カタリ手及び運営スタッフの参加を必須とし、必要に応じて色 (クラスごと班) リーダーについても中学校対応研修②及び③に参加することを推奨した。

(2) 研修テキストの作成

中学校対応研修を実施するに当たり、クルーは、高等学校におけるワークショップにも参加することを前提に「基本研修」及び「ワークショップ演習」で講義及び演習を受講する。「J r. キャリサポ」では、それ以外の知識として、高等学校用のテキストを基礎に、高校生と異なる項目及び特性等についてテキストにまとめ、作成することとした。

特に重要な項目としては、

- a 中学生の特性と理解
- b アイスブレイク
- c カタリ
- d ワークシート

の4項目が挙げられる。

(3) 研修内容

ア 中学校対応研修(①-④共通)

「中学生の特性と理解」

ここでは、「J r. キャリサポ」に参加するクルーの個々のプレゼンテーション能力を向上させる観点から、以下の7つの項目について取り上げた。

- a プレゼンテーションの3つの要素
- b 発信できる自分になる
- c 内容を構成する3つの重要な要素
- d 話を組み立てる技法
- e ワークショップ「CBS法」におけるプレゼンテーション
- f プレゼンテーションの位置づけと役割
- g 高校生と中学生の違いについて

また、ワークショップ内でのクルーのコミュニケーション能力を併せて向上させる要素を含む内容とした。

今回、「J r. キャリサポ」に参加を希望したクルーの中には、学校教育教員養成課程初等中等教育専攻中学校コースや学校教育教員養成課程特別支援教育専攻、養護教諭養成課程、児童学科、社会福祉学専攻の学生が多く、ある程度専門的な知識を有するキャリサポの経験豊富なベテランのクルーが集まったことで、より内容の濃い研修会が実施できたと思われる。



図1 中学校対応研修

イ 中学校対応研修①

「アイスブレイク研修(実践)」

普段、「キャリサポ」では、研修内容としない項目であるが、「J r. キャリサポ」では、中学生の特性等を考慮し、中学校で導入可能なアイスブレイクについて当センターが作成したアイスブレイ

ク集の中から、検討し、実際に体験し、実施可能な内容かどうかを検証する内容とした。

特に中学校からの要望もあり、できるだけ男女の生徒が直接触れ合うことがないようなアイスブレイクを探したが、大変な労力と時間を要した。



図2 アイスブレイク研修

ウ 中学校対応研修②

「カタリ研修a(設計と実践)」

キャリサポは、生徒自身の「今」までの自分を知る(第1ステージ)、「カタリ」を聞いて得たことに気づく(第2ステージ)、「これから」を考える(第3ステージ)の3つのステージから構成されているが、今回の「J r. キャリサポ」実施に当たり、第2ステージにおけるカタリは重要な要素であり、テーマに沿ったカタリ手を選出することは重要な要件だった。

今回のカタリ手は、6名をあらかじめ大学生チーフが指名し、現在カタリ手各自が持っている高等学校でのワークショップ用のカタリを、中学校用に内容を再構築し、時間も普段より5分短い10分のカタリを作成してもらうこととした。

この研修は、企画実施日の80日前に実施することで、カタリ手の意識付けとカタリ作成時間が十分確保できるように設定した。

エ 中学校対応研修③

「カタリ研修b(制作と実践)」

カタリ研修aで再構築されたカタリを運営スタッフ及び育成研修課キャリサポ担当者の前でカタリ手が発表し、内容の精選を行う研修会である。

以下の項目がしっかりと反映されているかど

うかを確認する絶好の機会である。

- ①テーマ・内容
- ②構成、起承転結
- ③時間、時間配分



図3 カタリ研修

6名のカタリ手は、キャリサポの経験豊富なベテランであるが、1回で完成できたカタリ手はいない状況であった。学生たちは、振り返りや質疑応答、アドバイスを重ねることで熱意をもって取り組み、カタリを完成させることができた。最も完成までに時間を要した学生は、4度もカタリを作り直したということの後から聞き、意欲の高さを感じた。

オ 中学校対応研修④

「ワークシート研修（設計と実践）」

中学校におけるワークショップでは、Communication・brainstorming法（以下「CBS法」という。）を活用するワークショップを実施する。CBS法とは小グループで行われるコミュニケーション重視型のブレインストーミング法である。この手法では、「第1ステージ：『今』までの自分を知る」と「第3ステージ：『これから』を考える」でワークシートを使って、クルーとともに中学生自身が、現在と未来について考える。ワークシートの良否は、ワークショップが成功するか否かの重要なポイントでもある。ここでは、実際に使用するワークシートを使用し、リハーサルすることで使いやすさや改善点を見つけ出す研修を行うこととした。



図4 ワークシート研修

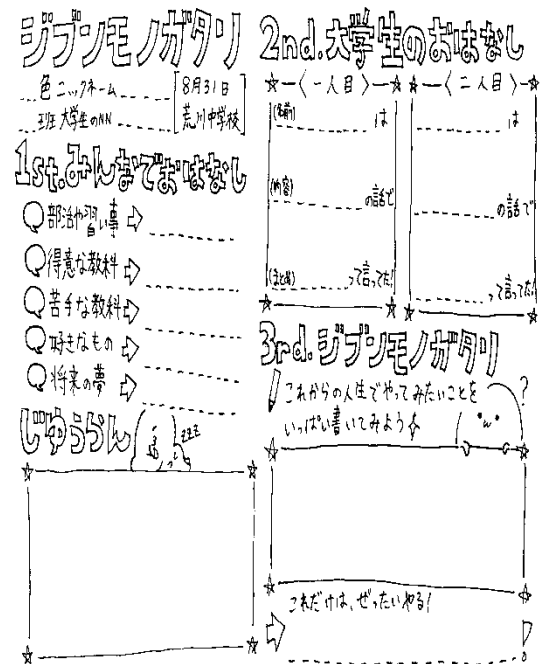


図5 ワークシート

(4) 合同リハーサルの実施とマニュアル・ワークシートの作成

ア 合同リハーサルの実施

平成30年8月6日実施 青森会場
 平成30年8月7日実施 弘前会場

クルーに対し、大学生チーフより企画テーマ「ジブンモノガタリ」設定の理由、企画に対する思い、学校・対象生徒の特徴等について説明があった。運営スタッフからは、タイムスケジュール、ワークショップ実施時の留意点、確認事項、バス乗車場所及び運行時間についての連絡があった。クルーは、中学生対応研修を受講したこともあり、スムーズに企画内容を理解し、第1ステージ及び第3ステージでのファシリテーションの仕方及び班内での意見共有を十分に行うことができた合同リ

ハーサルであった。

特別な配慮を必要とする生徒が有する障がい^(注)の理解、対応の仕方等の情報についても共有がなされた。その中で、ワークシートのサイズについて変更の提案があり、A4縦からA3横にレイアウトを変更し、裏面にはカタリ手紹介シートを印刷することとした。ユニバーサルデザインの観点が生かされた建設的な提案がクルーから出され、充実した合同リハーサルを行うことができた。



図6 カタリ手紹介シート



図7 合同リハーサル<青森会場>

(注): 本稿において、「障害」の表記を「障がい」と表記しています。



図8 合同リハーサル<弘前会場>

イ マニュアル及びワークシートの作成

大学生チーフ及び運営スタッフが中心となり、合同リハーサルにおいて改善が指摘された点をマニュアル(企画書)及びワークシートに反映する作業を行い、本番用として完成させたのち、本番で使用する物品等について、準備や確認を行った。

V ワークショップ実践

(1) 当日打合せ

大学生集合 11:20 (控え室: 図書室)

打合せ 11:25~12:35

各色(クラスごと)、カタリごと、タイムキーパーごと等各担当別に、配慮事項や各ステージのファシリテーションの仕方等、クルー同士での情報共有を行い、本番に備えていた。多少の緊張感の中、普段と変わらないいつもの「キャリサポ」と同じ対応を心がけている様子が全体として感じられた。



図9 大学生当日打合せ

(2) リハーサル 12:35～13:35

実際のワークショップの流れに沿い、入場から退場までリハーサルを行った。

各クルーとも本番さながらの熱の入ったリハーサルであった。



図10 体育館でのリハーサル



図11 体育館でのリハーサル

(3) 企画(ワークショップ) 13:35～15:25

ワークショップの流れは、以下のようになっている。

<ワークショップ>

- ・オープニング 13:35～13:50 (15分)
(入場・趣旨説明, アイスブレイク)
- ・第1ステージ 13:50～14:05 (15分)
- ・カタリ手紹介, 移動 14:05～14:10 (5分)
- ・第2ステージ(カタリ1回目) 14:10～14:25
(10分+質疑応答含む予備時間5分)
- ・休憩 <14:25～14:35 (10分)>
- ・第2ステージ(カタリ2回目) 14:35～14:55
(10分+質疑応答含む予備時間10分)
- ・第3ステージ 14:55～15:15 (20分)
- ・エンディング(振り返り, 退場) 15:15～15:25
(10分)

・オープニング

ア 中学生入場

(赤, 青, 黄, 緑, 白, 橙のクラスごと色グループの順で体育館に入場)

各色の誘導係の大学生が, 自分のグループのプラカード係が立っているところまで誘導, 整列係が人数を確認しながら整列させる。集まり次第着席する。

イ あいさつ 当日の流れ紹介(約7分)

大学生チーフのあいさつ

当日の流れ(スケジュール紹介)

運営スタッフの紹介



図12 ワークショップテーマ



図 13 オープニング



図 15 グループ内自己紹介

ウ アイスマイク

ほめっこゲームを実施。ほめっこゲームとは、グループ内の相手の人を順番に前の人の言った言葉に続けて褒めあい、言葉をつなげていくゲームである。中学生が理解しやすい内容を行った結果、比較的スムーズに行うことが出来、緊張感も多少ほぐれた感じがした。



図 14 アイスマイク

・第1ステージ

ア グループ内自己紹介

イ 大学生との対話

ワークシートを使い、中学生の夢、興味のあるものについて話す。話した内容を聞き取ってどのカタリ手が良いのかを中学生に勧める。

ウ 「カタリ手紹介シート」の配付



図 16 第1ステージ 大学生との対話

・第2ステージ

ア カタリ（体験談）

「カタリ（10分）質疑応答（2分）」を2度行う。カタリ手以外の大学生は中学生と一緒に話を聞きながら、中学生の様子に目を配る。

中学生にはワークシートに感想、心に残った言葉等を書いてもらう。カタリを聞くクルーは、プレゼン評価シートを使用し、カタリ手の感想・評価を書く。



図 17 第2ステージ カタリ



図 18 第 2 ステージ カタリ



図 20 エンディングの隊形

・休憩

休憩時間中も、中学生からの質問について、大学生はしっかりと対応をする。

・第 3 ステージ

ア 感想

カタリの感想を中学生に聞く。

イ 目標設定

ワークシートに目標を書く。

中学生に、自由に考えることを意識させる。今後の中学生自身の目標について、自己決定させる。



図 21 中学生による感想発表



図 19 第 3 ステージ 目標設定

・エンディング

ア 感想発表

大きなまとまりになる。

大学生チーフの誘導のもと、中学生だけで円になり、何人かの中学生に感想を聞く。

イ 退場

各クラスごとグループの順で退場する。

大学生チーフのあいさつ後、体育館から退場する中学生をハイタッチで見送る。

(4) 大学生の振り返り 15:30~16:20

控え室にて、個人反省、クラスごと色グループの反省、次回のワークショップの課題や意見等の全体共有を行った。

どの大学生もやり終えたという爽快感と達成感・成就感を感じた半面、中学校でのワークショップの難しさを改めて感じた一日であったように思われる。

VI 事後アンケート

1 荒川中学校教職員事後アンケート

回収率 71% (14名中10名提出)

問1 貴校で開催された「Jr. キャリサポ」の満足度についてお知らせください。

5	大いに良かった	4	40%
4	良かった	4	40%
3	普通	2	20%
2	あまりよくなかった	0	0%
1	よくなかった	0	0%

10

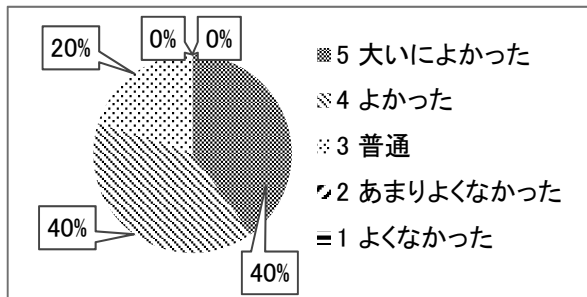


図22 実施満足度

問2 貴校にとっての「Jr. キャリサポ」を実施したねらいは達成できましたでしょうか。

5	大いに達成できた	3	30%
4	達成できた	5	50%
3	概ね達成できた	0	0%
2	あまりできなかった	1	10%
1	できなかった	1	10%

10

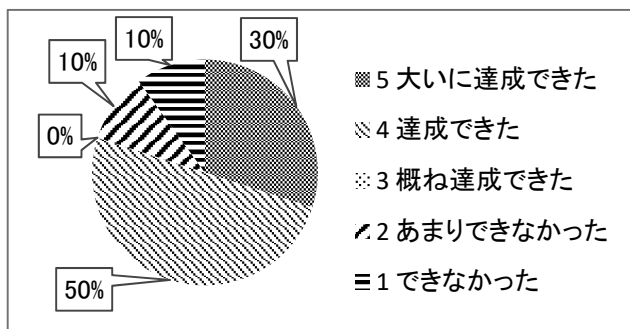


図23 実施のねらい

問3 貴校生徒は「Jr. キャリサポ」に参加したことで、進路や目標を明確に意識することができたと思いますか。

5	大いにできた	1	10%
4	できた	7	70%
3	普通	0	0%
2	あまりできなかった	2	20%
1	できなかった	0	0%

10

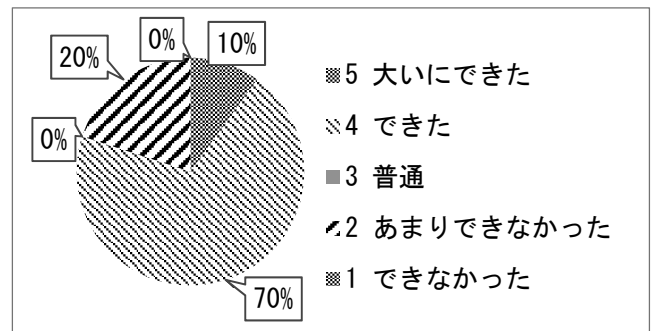


図24 進路目標の明確化

問4 貴校に訪れた大学生のあいさつ等の対応はいかがだったでしょうか。

3	よかった	7	70%
2	普通	3	30%
1	よくなかった	0	0%

10

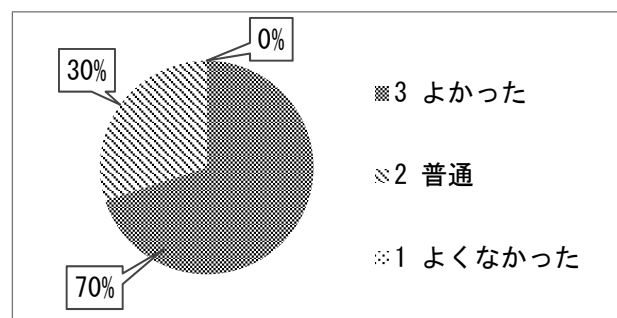


図25 大学生のあいさつ等の対応

問5 貴校に訪れた大学生の服装についてはいかがだったでしょうか。

3	よかった	7	70%
2	普通	3	30%
1	よくなかった	0	0%

10

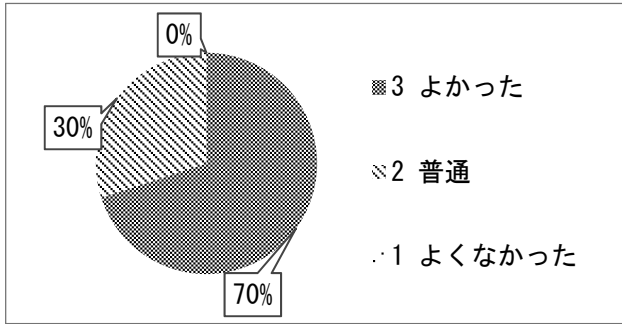


図 26 大学生の服装

問 6 大学生の生徒（中学生）に対しての対応は
いかがだったでしょうか。

3	よかった	8	80%
2	普通	2	20%
1	よくなかった	0	0%

10

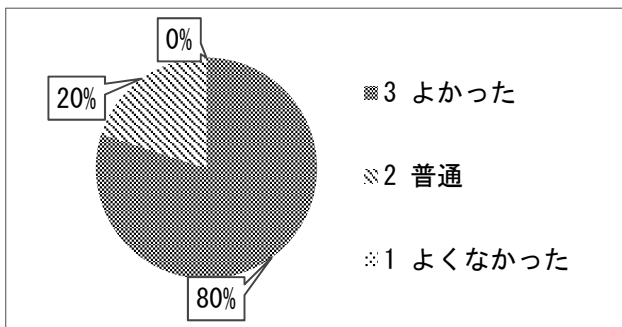


図 27 中学生に対しての対応状況

問 7 プログラムの進行に対してはいかがだった
でしょうか。

3	よかった	10	100%
2	普通	0	0%
1	よくなかった	0	0%

10

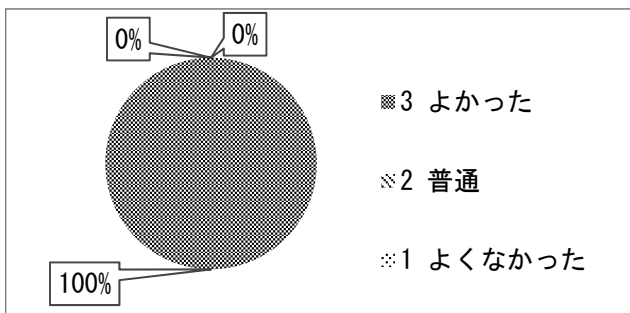


図 28 プログラムの進行

問 8 大学生の「カタリ（体験談）」の内容はいか
がだったでしょうか。

3	よかった	8	80%
2	普通	2	20%
1	よくなかった	0	0%

10

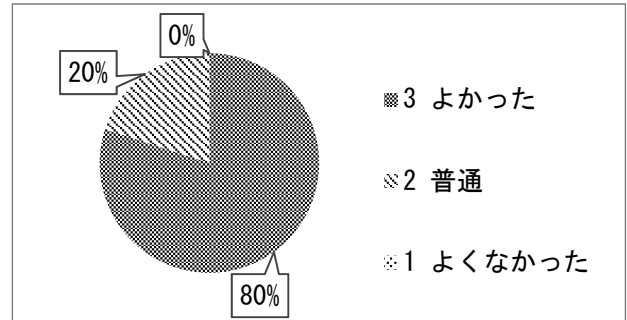


図 29 「カタリ（体験談）」体験談の内容

回答した教職員全員が、プログラムの進行につ
いてよかったと回答していることから、今回の「J
r. キャリサポ」については、当センター、荒川中
学校、参加大学生の3者連携がスムーズに行われ
たものと思われる。

2 荒川中学校中学生事後アンケート

対象生徒数	1 学年	55 名
	2 学年	44 名
	3 学年	52 名
	計	151 名

回収率 93% (141/151 名)

<全学年>

問 1 ワークショップ「J r. キャリサポ」での
大学生との交流は、現在や将来の自分を考える機
会となりましたか。

5	大いになった	126	89%
4	ある程度なった	13	9%
3	あまりならなかった	0	0%
2	全くならなかった	0	0%
1	わからない	2	2%

141

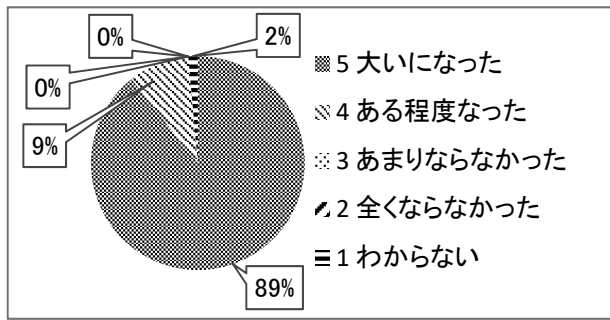


図30 将来に対する意識の変化

全校生徒の98%の生徒が、現在や将来の自分について考える機会となったと感じている。

問2 大学生の「カタリ（体験談）」は、自分の将来を考える上で役立ちましたか。

5	大いに役立った	124	88%
4	ある程度役立った	15	11%
3	あまり役立たなかった	0	0%
2	全く役立たなかった	0	0%
1	わからない	2	1%

141

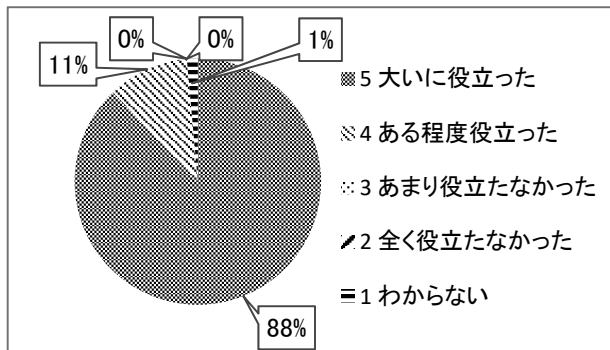


図31 大学生の「カタリ（体験談）」

大学生のカタリ（体験談）は、聞いた生徒のほとんどが、自己の将来を考える上で参考になったと感じている。

問3 ワークショップ「Jr. キャリサポ」に参加したことで、自分の進路についてしっかりと考えることができましたか。

5	できた	107	76%
4	ある程度できた	29	21%
3	あまりできなかった	0	0%
2	できなかった	0	0%
1	わからない	5	3%

141

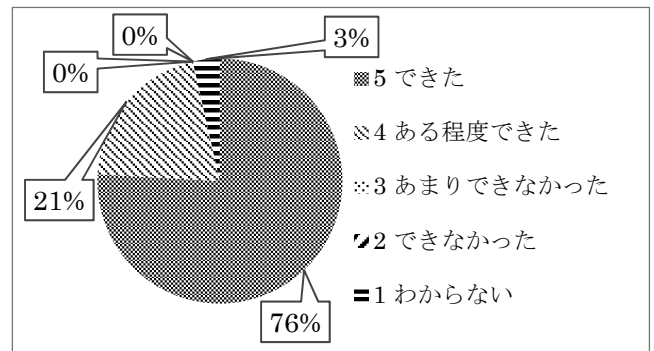


図32 進路目標の明確化

自己の進路について、しっかりと考えることができたという生徒が76%であり、ある程度考えることができた生徒21%を含めると97%の生徒が自己の進路について考える機会となったと感じている。

問4 ワークショップ「Jr. キャリサポ」を経験することで、これからの自分が変わると思いますか。

5	変わると思う	102	73%
4	ある程度変わると思う	23	16%
3	あまり変わらないと思う	2	1%
2	変わらないと思う	2	1%
1	わからない	12	9%

141

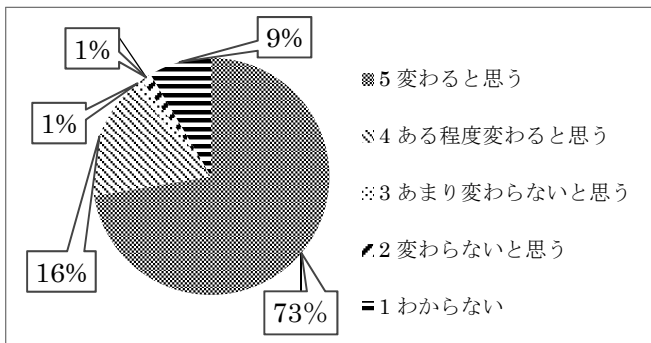


図 33 実施後の意識変化

ワークショップ「Jr. キャリサポ」を経験したことで、将来についてこれからの自分を前向きにとらえることができた生徒が 73%，ある程度とらえることができた生徒 16%を含めると 89%の生徒が自分は今よりも成長し、変わると思っている。

3 大学生実施報告書における成果及び課題

キャリサポの各大学生チーフは全員、企画終了後 1 ヶ月を目途に実施報告書を以下のような観点で作成し今後の企画実施のために報告を行うこととしている。以下、今回のワークショップ報告書の内容を記載する。

1. 企画（準備含む）を振り返って

企画を振り返って、一番ここが重要だと思ったのはクルー集めでした。

チーフの業務というもの一つ一つのタスクで見るとそう多くはありませんので、しっかりと計画的に進められているチーフにとってはかなり楽であると思います。しかし、現実にはそう上手くいかず、様々なプレッシャーに悩まされます。その大部分を占めるのはクルー不足でした。

夏企画は特に顕著で、大規模校では大きな問題になっており企画開催が危ぶまれるような事態にまで発展しているところもありました。

『クルー集めは夏休みが始まる前に完了させる』これを深く痛感した夏でした。

直接会う機会がないと声はかけづらいものです。会えるうちに自分の企画に参加させましょう。

ここまで書いてきてわかる通り、中学校だからという事項は特になかったように思います。

逆に、初の中学校企画ということもあり大人の手厚いサポートがあったので学校側のキャリサポに対しての理解があったため、とてもやりやすかったです。

高等学校と変わらず、中学校がキャリサポ、そして大学生に何を求めているかを理解し、的確に反映させれば何ら難しいことはありません。

2. 評価できる事項

自分がどういうチーフなのか、どこが弱い部分なのかを理解したうえで運営スタッフを構成したので、この企画は無事に終わらせることができました。実務に強い運営スタッフ二人を柱に企画作りを進められたのでとてもスムーズでした。

あと、『キャリサポは楽しいものだ』という僕の考えに同調してくれたクルーたちにも安心できました。初の中学校企画ということもあり参加のハードルが高かったのか、よく来てくれる強いメンバーがほとんどだったように感じます。

中学生の将来に対しての考え、また、学年も全学年と幅が広がったため、オーソドックスな企画にしたのも良かったと感じました。

3. 課題となった事項

課題は『準備は念入りに行え』ですね。正直企画チーフが、二回目ということもあり慢心していたため準備は怠ったなと思いました。

4. チーフからまとめ（感想、思ったこと、次のチーフへのアドバイス等）

初代中学校企画チーフとなってしまったわけですが、僕は面白そうだからという思いで、この企画でチーフをやってみようと思いました。

案の定、途中でキツと思うことがありましたが、最後の年のキャリサポで、このような企画ができてよかったなと思います。

来年度以降キャリサポがどうなっていくのかはわかりませんが、企画チーフも参加クルーもさらに減少していくと思います。そんな中で『楽しい』キャリサポというものをしっかりとつな

げていけたら、キャリアポも安泰になるのではないかと思います。誰もキツイボランティアには、率先して参加したくはありませんよね。

これからも『楽しい』そして『面白い』仲間との出会いをここで作ってほしいというのが僕の最後の願いです。では、これにて僕の最後のチーフ業務を終えたいと思います。

この報告書から大学生は、中学校の教職員と中学生が「J r. キャリサポ」に、そして大学生に何を求めているかを理解し、企画内容的に反映させることができれば、ワークショップ自体は高等学校での企画と相違なく、何ら難しいことではないと感じていること、そして、中学生の将来に対しての考え、また、対象学年も1～3学年と年齢の幅や多様な発達段階を考慮すると、ワークショップの内容は、基礎的な企画内容が妥当であったと感じていることがわかる。

VII 考察

1 成果

(1) 大学生の参加姿勢

今回、「J r. キャリサポ」に参加したクルーは非常に積極的で、目的意識が高く、ファシリテーション能力やコミュニケーション能力を向上させ自分のものにしようとする姿勢がワークショップ中の随所に感じられた。このことが、中学生にも良い影響を与えたと思われる。

(2) カタリの質の向上

今回、カタリを行った6名のカタリ手は、キャリアポの経験豊富なベテランのカタリ手である。しかし、あえて普段高等学校で使用しているカタリを作り直してもらった経緯がある。生徒の実態に即した語彙、内容、時間配分、語り方等多岐にわたり対応してもらった。来年度以降もカタリ手を養成するスキームを確立できたことは非常に大きな成果である。

(3) ワークショップの構成

「J r. キャリサポ」実施に当たり、一番苦勞した点は、実施時間の制約であった。高等学校での「キャリアサポ」実施における通常の設定時

間より50分短縮という条件での計画である。実施内容の精選と時間配分の見直しをすることで実施が可能であるとの見込みはあったが、実際に経験したことで、来年度以降の実施に確信を持って取り組むことができる。

2 課題

(1) 中学校対応研修のあり方

中学校の実態や要望に合わせた、より教育効果の高い「J r. キャリサポ」にするためには、研修内容の深化等、大学生との連携を強固にし、主体的に活動できる人財を育成していかなければならない。カタリ手の育成も急務である。更なる研修内容の精選、実施方法、実施時期についても検討していきたい。

(2) 大学生の移動経費の確保

高等学校での「キャリアサポ」実施については、実施高校側に大学生の移動経費（バス代）を負担していただいている。今回、本事業はパイロット事業という位置付けもあり、大学生の移動経費を当センターが負担しての実施であった。大学生の移動経費の予算確保が今後の実施に向けて大きな課題である。

(3) 実施中学校担当者との連携

実施に当たり、中学校担当者との連絡・調整は非常に重要な要素である。特に中学生に対する事前・事後指導等を実際に行う中学校教員の「J r. キャリサポ」に対する理解が必要である。育成研修課担当課員と中学校担当者が対話を重ね、理想と現状とについて相互に理解し、良好な関係を継続して築けるかが今後の課題である。

VIII おわりに

キャリアサポ事業は、生産管理や品質管理などの管理業務を継続的に改善していくPDCAサイクルの手法を活用している。この手法を常に繰り返すことで、事業開始以来現在に至るまで発展し、成長してきた。事業全体としては、成熟期に達しつつある。今後もPlan(計画)・Do(実行)・Check(評価)・Action(改善)を繰り返すことで、更なる事業の発展を期待し、本来の目指す姿である「高校生が将来について主体性に考え、チャレンジす

る心を自らが育むことができる」ようになるために今後も努力していきたい。

参加した大学生の大半は、自己の学業や、アルバイト等に忙しい毎日を送っている中、その合間を縫い、数回にわたる研修を受け、高等学校での「キャリアポ」に参加している。今回、パイロット事業とはいえ、中学校での「Jr. キャリサポ」を実施するに当たり、追加の研修を受け、熱意を持って取り組む大学生の姿勢がすばらしかった。

キャリアポは、大学生が中・高校生と正面から向き合い、自己の悩みや葛藤から得たことを伝える中で、その問題をどうやって乗り越えてきたのかを大学生自身にも内面化させ、参加した中・高校生とともに大学生も成長できるWIN-WINの関係が成立している事業でもある。

平成30年度、「Jr. キャリサポ」を実施していただいた荒川中学校からは、来年度の教育課程編成に向けた学校評価を行ったところ、8月に実施した「Jr. キャリサポ」の授業は有意義だったという評価を得たとの話も伺っている。また、来年度も実施を検討したいとの要望も寄せられている。今年度ワークショップを参観した中学校の教職員や教育関係者からも、来年度も見学させてほしいとの問い合わせが来ている。事業担当者としては、うれしい限りである。現在、平成31年度以降も「Jr. キャリサポ」を実施する方向で検討している。

最後になるが、キャリアポ事業を支えてくれた大学生の熱意に感謝し、本稿の結びとする。

<参考引用文献>

- ・文部科学省編：文部科学時報(2013)
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(中央教育審議会答申)
- ・文部科学省編：中学校学習指導要領解説総則編(2017)
- ・厚生労働省編：自殺対策白書(2018)
- ・箕輪雅美(京都産業大学経営学部)
「モーニング娘。とAKB48のビジネスシステムーその生成プロセスと新寄生・競争優位性ー」(京都マネジメント・レビュー22, pp. 43-63. (2013))
- ・青森県総合社会教育センター(2016)
「研究紀要第27号」



図 34 「Jr. キャリサポ」荒川中学校
企画参加クルー集合写真

(参考資料)

平成 30 年度 キャリサポ実施高等学校一覽

No.	月	日	曜	高校	対象生徒	参加大学生	手法
1	6	9	土	県立青森南高校	1 学年 (6 クラス 215 人)	75 名	CBS
2		30	土	青森山田高校	1 学年 (1 クラス 22 人)	18 名	TKJ
3	7	7	土	東奥義塾高校	1 学年 (2 クラス 79 人)	34 名	CBS
4		14	土	県立青森南高校	1 学年 (6 クラス 222 人)	72 名	CBS
5	8	20	月	県立三戸高校	2 学年 (2 クラス 43 人)	25 名	CBS
6		22	水	県立田子高校	1・2 学年 (2 クラス 21 人)	17 名	TKJ
7		22	水	県立野辺地高校	1 学年 (2 クラス 77 人)	34 名	TKJ
8		24	金	県立青森西高校	1 学年 (6 クラス 239 人)	74 名	RSB
9	9	3	月	県立金木高校	1 学年 (1 クラス 17 人)	11 名	TKJ
10		3	月	県立三沢商業高校	2 学年 (4 クラス 156 人)	40 名	CBS
11		5	水	県立田名部高校	1 学年 (5 クラス 193 人)	45 名	RSB
12		7	金	県立弘前中央高校	1 学年 (6 クラス 220 人)	56 名	TKJ
13		10	月	県立青森商業高校	2 学年 (6 クラス 229 人)	50 名	CBS
14		12	水	県立黒石高校	1 学年 (4 クラス 159 人)	43 名	CBS
15		14	金	県立五所川原農林高校	2 学年 (4 クラス 127 人)	28 名	RSB
16	11	3	土	県立浪岡高校	1 学年 (2 クラス 58 人)	33 名	TKJ
17		17	土	八戸工業大学第二高校	1 学年 (6 クラス 190 人)	58 名	CBS
18	3	4	月	県立青森中央高校	1 学年 (5 クラス 199 人)	50 名	CBS
19		5	火	県立五戸高校	1 学年 (2 クラス 49 人)	20 名	TKJ
20		5	火	県立七戸高校	1 学年 (4 クラス 129 人)	48 名	CBS
					76 クラス 2,644 人	831 名	

平成 30 年度 Jr. キャリサポ実施中学校一覽

No.	月	日	曜	高校	対象生徒	参加大学生	手法
1	8	31	金	青森市立荒川中学校	全学年 (7 クラス 144 人)	35 名	CBS

生涯学習・社会教育関係職員研修講座の 在り方について

～変遷とアンケート調査から今後を考える～

教育活動支援課 社会教育主事 花 田 一 仁

要 旨

本稿は、人財育成や家庭教育の他、社会体育も担当する等、多岐にわたって業務を抱える県内市町村の生涯学習・社会教育関係職員を対象に、青森県総合社会教育センター（以下「当センター」という。）が実施してきた研修講座に関する現状とニーズについて調査するとともに、今後の生涯学習・社会教育関係職員研修講座（以下「本講座」という。）の在り方について分析・研究したものである。

研究方法として、今年度実施した本講座の受講者アンケート結果と、県内 40 市町村の教育委員会及び公民館等の社会教育施設から回答していただいた「生涯学習・社会教育関係職員研修講座に関するアンケート調査」のデータを基に調査研究を行った。

その結果、本講座に対する受講者の満足度は、全講座とも 90%以上が「大変満足」又は「満足」と回答しており、研修内容について満足度が高いことがわかった。また、今年度本講座を受講することができなかった理由としては、「業務の多忙化」、「担当業務との重複」、「人員不足」であることが明らかになった。

これらのことから、本講座の必要性和県としてのセンター機能を更に充実させる方向性について、検証することができた。

キーワード：ネットワーク，ニーズに応じた研修内容，多忙化，人員不足

目 次

I はじめに	24
II 事業の内容	24
III アンケートの結果と考察	28
IV まとめ	40
V おわりに	41

I はじめに

平成30年12月の中央教育審議会答申において、「今後、新たな地域づくりに向けた社会教育の振興を図っていくためには、各教育委員会における社会教育主事の配置の充実やネットワーク化とともに、社会教育主事が、単に教育委員会の枠内での業務にとどまらず、首長部局や社会教育に関わる様々な主体等も含め、広く社会教育に関する取組を積極的に支援するよう、学びのオーガナイザーとしての業務内容の高度化を図るなど、総合的な視点に立った地域の社会教育振興に取り組むことが重要と考える。」とされている。

また、青森県教育委員会の平成30年度社会教育行政の方針として、「県民が、自己の向上を目指して生きがいのある充実した生活を送るとともに、豊かで住みよい地域社会を形成することができるよう、学びを生かしつながりをつくり出す社会教育の推進に努める。」としており、「学校・家庭・地域の協働による未来を担う人財の育成」や「活力あるコミュニティの形成に向けた人財の育成」等に取り組むこととしている。

このような背景の中、当センターにおける本講座は、県内の市町村の生涯学習・社会教育関係職員にとって重要な役割を担っているといえる。

市町村の生涯学習・社会教育関係職員は、自身も事業を抱え、また所属管内で開かれている研修の参加を鑑みながら当センターの本講座の受講も検討しなくてはならない。そこで、生涯学習・社会教育関係職員が置かれている現状や職員研修に対する要望・課題などを分析し、今後の本講座へ活かしていく必要があると考えた。

以下、今年度行った本講座受講者からの受講後のアンケートと、各市町村教育委員会と各市町村公民館施設等へ依頼し実施したアンケートをもとに、本講座の成果と課題や、今後の在り方について考察することとする。

II 事業の内容

本事業の趣旨は、「生涯学習・社会教育関係職員及び関係団体職員等の資質向上のため、業務

遂行に係る基礎的・実務的な研修を行うとともに、地域課題の把握と課題解決につながる実践的な知識・技能の習得と、人財育成を目的とした研修を行い、ネットワーク形成を図る。」としている。

これは、社会を取り巻く環境の変化（複雑化・多様化・情報化）に対応した研修の必要性があることに加え、地域づくりの中核的役割を担う人財の育成が求められるところにある。しかしながら、各市町村では人員削減や兼務による多忙化が進み、当センター開催の本講座への受講機会も制限されるようになってきた。

そこで、当センターでは、これまで研修内容の精選や実施方法の工夫を行ってきており、今年度は「新任職員研修」・「センター研修」・「地区研修」の3つのカテゴリーを設けて本講座を実施した。

このように研修の機会を設けることにより、地域の現状や課題に即して実践する人財が育成され、国や県の施策等の動向にも対応した実務が可能となり、社会教育行政に関わる職員としての資質向上と人財育成が図られ、地域課題の解決や未来につながる地域づくりを活性化させようとするのが本事業である。

1 職員研修講座の変遷

「生涯学習・社会教育関係職員研修講座」に関する事業体系の変遷を（図1）に、「生涯学習・社会教育関係職員研修講座」への統合整理についてを（図2）に、平成24年度からの本講座の変遷の状況を（表1）としてまとめておく。

なお、平成元年度から平成23年度までの変遷については当センターの研究紀要第23号に記載されているため、本稿では平成24年度以降について詳述する。

(1) 平成24～26年度

この3年間は、業務遂行の基礎的な知識・技能の習得を目的とした初任者研修（基礎研修）、社会教育における専門的知識と技術の修得などを目的としたスキルアップ研修（中央研修）、県内6地区の課題を掘り起こしながら、それぞれの課題に対応できる即戦力となる人財の育

成を目的としたスキルアップ研修（地区研修）の3本柱で研修を行った。

新任職員を対象にした初任者講座に関しては、その形態と内容を変えずに、平成元年度から平成18年度まで実施した。平成19年度から23年度までの5年間は実施していなかったが、平成24年度から初任者研修（基礎研修）として再び実施している。

なお、公民館運営や管理者に関する研修等も統合・整理してきたが、平成26年度には「公民館と住民のアシスト講座」として単独事業が設けられた。

(2) 平成27～28年度

平成27年度から各研修の名称を初任者研修、中堅職員研修、地区研修と変更し、より受講対象者を明確にし、各テーマに添った内容で研修を行った。また、平成26年度から27年度に行った「公民館と住民のアシスト講座」を平成28年度から「公民館パワーアップ講座」に名称変更し、全4回の講座のうち2講座を、中堅職員研修と合同開催した。

(3) 平成29年度

初任者研修が初任者ばかりでなく異動により教

育委員会に配属された職員も含むため、新任職員研修と名称を変更し、対象者を拡大し、中堅職員研修も実務研修と変更した。また、実務研修の内容も社会教育に関する講義・演習を主とした「社会教育編」と、事業計画の立案やチラシづくりの実践などを学ぶ「実践テクニック編」に再編し、受講者のニーズに応える形で【センター会場】として行った。また、地区研修も実務研修と捉え【各地区会場】とし、地域課題の解決に向けた研修内容で実施した。平成29年度は全4回の公民館パワーアップ講座のうち1講座を実務研修と合同開催した。

(4) 平成30年度

新任職員研修【前期・後期】、センター研修、地区研修の3本柱で行った。また、「新任職員研修」や「地区研修」の一部を「センター研修」と合同開催したことや、従来生涯学習課や各教育事務所が担当していた研修も、当センターの研修に統合した（図2参照）ことにより研修回数は年間10回となり、様々な業務を抱え、多忙な市町村の職員にとっても受講しやすい形となった。今年度の実績については、表2にまとめておく。

指導者研修	職員研修	元年	◇社会教育初任者講座 ◇社会教育基礎講座 ◇社会教育専門講座(社会教育計画) ◇社会教育指導員講座
		2年	◇社会教育初任者講座 ◇社会教育基礎講座 ◇社会教育専門講座(社会教育計画) ◇社会教育専門講座(社会教育調査) ◇社会教育指導員講座・社会教育管理者講座
		3年	◇社会教育初任者講座 ◇社会教育基礎講座 ◇社会教育専門講座(社会教育計画) ◇社会教育専門講座(調査研究) ◇社会教育指導員講座 ◇社会教育管理者講座 ◇家庭教育相談担当者講座
		4～5年	◇社会教育初任者講座 ◇社会教育専修講座(3コース) ◇社会教育指導員講座
		6～10年	◇社会教育初任者講座 ◇生涯学習・社会教育専修講座(調査・計画・地域活性化・公民館運営の4コース) ◇社会教育指導員講座
指導者研修事業	職員研修	11～12年	◇社会教育初任者講座 ◇生涯学習・社会教育アドバンスセミナー ・全体研修 ・パワーアップ研修…学習機会提供に関する領域、情報提供・相談に関する領域、生涯学習振興施策に関する領域、 団体・グループ育成に関する領域、地域づくりに関する領域、調査に関する領域 ◇まなびいステーションセミナー ◇社会教育指導員講座
		13年	◇社会教育初任者講座 ◇生涯学習・社会教育アドバンスセミナー ・トピックス研修 ・パワーアップ研修…自己開発研修 ◇まなびいステーションセミナー
		14年	◇社会教育初任者講座 ◇生涯学習・社会教育アドバンスセミナー ◇まなびいステーションセミナー
職員・指導者研修事業	社会教育関係職員研修	15～20年	◇生涯学習・社会教育関係職員講座
		21～23年	◇生涯学習・社会教育関係職員研修講座
市町村・団体支援	市町村及び団体への支援	24～30年	◇生涯学習・社会教育関係職員研修講座

図1 「生涯学習・社会教育関係職員講座」に関する【事業体系】の変遷

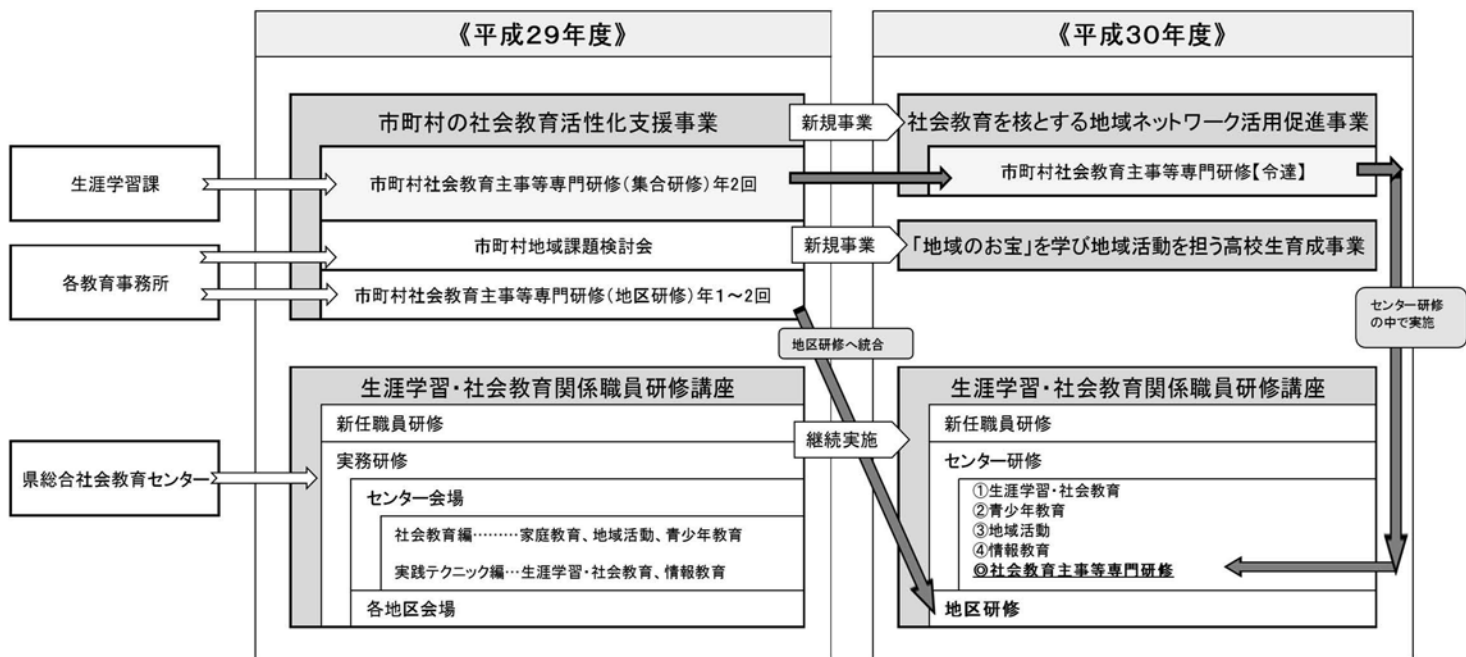


図2 「生涯学習・社会教育関係職員講座」への統合・整理について

表1 「生涯学習・社会教育関係職員研修講座」の変遷

	元年～23年度	24～26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
	・社会教育初任者講座 →元年～14年単独実施 ・社会教育基礎講座 ・社会教育専門講座/社会教育専修講座/生涯学習・社会教育アドバンスセミナー/生涯学習・社会教育関係職員講座 →2年以降、社会教育計画、社会教育調査、全体研修、選択研修等、コースを設定～23年 (*公民館運営コース6年～10年、公民館職員研修15年) ・社会教育指導者講座 ・社会教育管理者講座 ・まなびいステーションセミナー ・実務担当者研修	生涯学習・社会教育関係職員研修講座 初任者研修(基礎研修) スキルアップ研修 中央研修 地区研修	生涯学習・社会教育関係職員研修講座 初任者研修 中堅職員研修 地区研修	生涯学習・社会教育関係職員研修講座 初任者研修 中堅職員研修 地区研修	生涯学習・社会教育関係職員研修講座 新任職員研修 実務研修(センター会場) 社会教育編 実践テクニック編 実務研修(各地区会場)	生涯学習・社会教育関係職員研修講座 新任職員研修 センター研修 地区研修

※公民館職員対象の研修は、15年に「生涯学習・社会教育関係職員講座」で実施。26～27年には単独事業として実施。28～29年は、合同開催。

公民館職員	(26年度のみ) 公民館と住民のアシスト講座	公民館と住民のアシスト講座	公民館パワーアップ講座 ※うち2講座は、中堅職員研修と合同開催	公民館パワーアップ講座 ※うち1講座は、実務研修(センター会場)社会教育編と合同開催	☆公民館等の防災・減災教育機能強化事業(単年度実施)
-------	---------------------------	---------------	------------------------------------	---	----------------------------

表2 平成30年度の実績

【新任職員研修】

区分	内容	講師	実施期日	受講者数
前期	社会教育行政が担う役割	国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター 専門調査員 國府田 大 氏	5月18日 (金)	48名
後期	事業計画と評価・改善について	秋田大学大学院 教授 原 義彦 氏	9月14日 (金)	31名

※前期は第1回センター研修、後期は第6回センター研修と合同開催。

【センター研修】

回	区分	内容	講師	実施期日	受講者数
1	生涯学習・社会教育	社会教育行政が担う役割	国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター 専門調査員 國府田 大 氏	5月18日 (金)	48名
2	情報教育	パワーポイントを使ったチラシづくりの 実践	パソコンITシステム 代表 長谷川 直宏 氏	6月7日 (木)	22名
3	地域活動	地域活動における「地域学校協働活動」 との関わり	一般社団法人 とちぎ市民協働研究会 代表理事 廣瀬 隆人 氏	7月11日 (水)	57名
4	情報教育	プレスリリースと交渉	NPO法人 日本プレゼンテーション協会 理事長 高野 文夫 氏	7月26日 (木)	26名
5	青年教育	協働によるまちづくり	やまなしの翼プロジェクト 代表 シナプテック株式会社 代表取締役 戸田 達昭 氏	8月20日 (月)	53名
6	生涯学習・社会教育	事業計画と評価・改善について	秋田大学大学院 教授 原 義彦 氏	9月14日 (金)	31名

【地区研修】 開催期日順

地区（開催市町村）	内容	講師	実施期日	受講者数
上北地区 (十和田市)	地域課題に合った社会教育活動	青森中央学院大学 経営法学部 准教授 佐藤 淳 氏	5月24日 (木)	73名
下北地区 (むつ市)	地域全体で子どもを育む活動の充実	弘前大学大学院 地域社会研究科 准教授 土井 良浩 氏	5月29日 (火)	24名
中南地区 (黒石市)	生きることと教育の本当の意味とは	恐山菩提寺 院代 南 直哉 氏	6月21日 (木)	62名
東青地区 (青森市)	地域活動における「地域学校協働活動」 との関わり	一般社団法人 とちぎ市民協働研究会 代表理事 廣瀬 隆人 氏	7月11日 (水)	57名
西北地区 (鱈ヶ沢町)	協働によるまちづくり	やまなしの翼プロジェクト 代表 シナプテック株式会社 代表取締役 戸田 達昭 氏	8月20日 (月)	53名
三八地区 (八戸市)	地域づくりにおけるネットワーク形成	むつ市まちづくりコーディネーター 桜田 真佐 氏	8月28日 (火)	24名

※東青地区は第3回センター研修、西北地区は第5回センター研修と合同開催。

Ⅲ アンケートの結果と考察

(平成 30 年度実施)

1. 受講者アンケート回答編

ア アンケート回答者

新任職員研修（前期・後期）

センター研修（1～6回）

地区研修（各地区計6回）の受講者

イ 回収率 68%（延べ420人）

【問1】

・研修講座の満足度にあてはまる番号に○を付けてください。

4（大変満足）

3（満足）

2（不満）

1（大変不満）

【三八地区研修での様子】

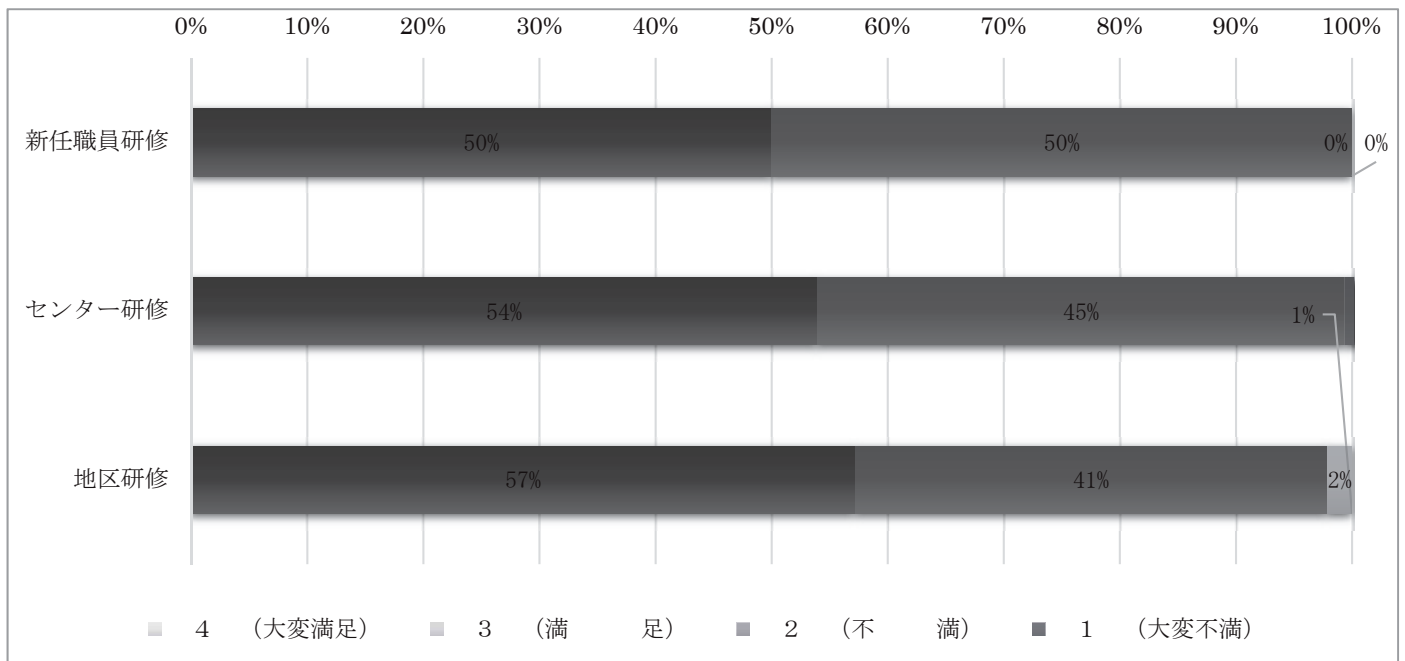


図3 研修講座の満足度

今年度実施した本講座受講者の回答は「大変満足」が53.7%と「満足」が45.7%で両者を合わせると99%を超える満足度となった。センター研修を兼ねて実施した新任職員研修では、前期は国立教育政策研究所社会教育実践研究センターから講師を招き、国の最新の動向を交えながらの講義を行い、後期には「事業計画と評価・改善について」講義を行った。

いずれの講座も、新任職員以外にも受講していただけするなど、国の方向性から年度末に向けた事業評

価について、事業運営に関する年間の流れを組んだ内容が受講者のニーズに合致していたと考えられる。

センター研修においては、生涯学習・社会教育、さらには地域活動の分野として、平成32年度から小学校及び特別支援学校小学部より順次実施されていく次期学習指導要領にある「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、「地域学校協働活動」を推進するための内容を扱った。

また、情報教育として、「パワーポイントを使ったチラシづくり」など業務に即実践できる内容であったことや著名な講師による研修にしたことが、高い満足度を得た要因と考えられる。

さらに、地区研修においては、前年度に各地区の課題について行ったアンケートからテーマを設定し、それに基づいた講師を招聘したことで、各地区のニーズに沿った形で実施できた。その結果、受講後の満足度が非常に高いものになったと考えられる。

センター研修と地区研修で「不満」と答えた受講者の理由は、いずれも「自分が考えていたテーマと内容にギャップがあった。」とアンケートでコメントしている。

【上北地区研修での様子】



【問2】 今後参加してみたいと思う研修内容の番号を選んでください。(複数回答可)

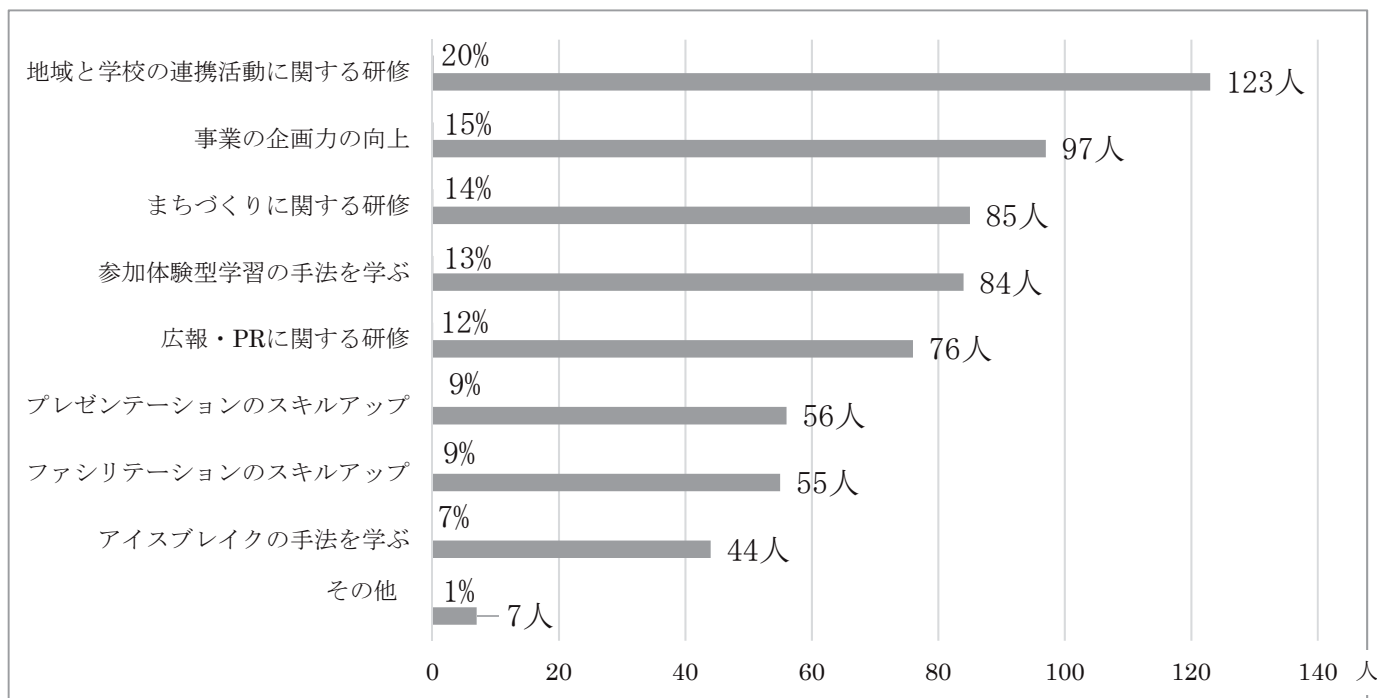


図4 今後参加してみたい研修内容

今後参加してみたい研修内容については、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて「地域学校協働活動」を推進するための内容が20%と最も多かった。次に多かったのが「事業の企画力の向上」15%、次いで「まちづくりに関する研修」14%、参加体験型学習の手法を学ぶ」13%、「広報・PRに関する研修」12%、以下図4の結果となった。

最も多かった「地域と学校の連携活動に関する研修」では「学校を“支援”する活動」から「地域と学校が協働して活動する」という考え方に変わって

今いく中で、他の地域ではどういった取組を行っているのか等、「地域学校協働活動」のポイントを知り、今後の活動の在り方について情報収集と共有することにニーズがあると考えられる。

「事業の企画力の向上」については、各市町村で展開する様々な事業において、参考事例や話し合いの手法を学ぶことなどに強いニーズがあると考えられる。

また、「まちづくりに関する研修」については、「参加体験型学習の手法を学ぶ」や「広報・PR

に関する研修」など、業務の中で即実践に生かしたい内容にニーズがあると考えられる。

【問3】各研修の受講者による自由記述

第1回センター研修兼前期新任職員研修「社会教育行政が担う役割」

・今年度初めて教育委員会へ異動になり、よくわからないまま業務を行ってきたが、今回の研修を受講し、生涯学習の理念、役割を理解することができた。

【講師：国立教育政策研究所

社会教育実践教育センター

専門調査員 國府田 大 氏】



・社会教育・生涯学習の基礎的な部分から、専門的部分まで、非常に分かりやすく学ぶことができた。今年度から社会教育主事が発令されたのであるが、改めて学び直す気持ちでのぞむことができた。

・少し難しかったです。初任であれば、法令等はもう少し後(半年くらい)に自分の事業が分かり、それは何の位置づけになるのか、という意味で学ぶ方が頭に入るのかなと思います。

第2回センター研修「パワーポイントを使ったチラシづくりの実践」

・今回初めてパワポでチラシづくりに挑戦しましたが、これまでエクセルでチラシ作りをしていたのに対し、とても作業が楽にできました。今後業務でチラシを作る場面は多いため、大変参考になりました。

・時間の関係もあるとは思いますが、全員一緒に先生と操作しながら説明していただく部分もあった方がよいと思いました。

・パワーポイントは、難しい印象がありましたが、学んでみるとテキストボックスや図形を挿入するとチラシが作ることが分かりました。チラシ作成の基本や注意する点も知ることができ、実りのある1日となりました。

【講師：パソコン IT システム

長谷川 直宏 氏 (左)】



第3回センター研修兼東青地区研修「地域活動における『地域学校協働活動』との関わり」

・理解しやすい話し方、説明の仕方をされていて、頭にスッと内容が入ってきました。地域学校協働活動についての本来の役割、課題が理解できました。

・地域づくりとは子どもたちを育てること、ふるさとに戻ってほしいと思う気持ちを育てることだと納得しました。

・地域を元気にするための学校の役割を再認識した。地域が楽しく、居場所があれば、子どもたちも地元に戻ってくる可能性が高くなる。学校における教育活動に「ふるさとの良さ探し」も入れるように努めたいと思った。

・地域コーディネーターとして、活動する道標をいただきました。学校支援地域から地域学校協働活動へ変わっていくためにポイントとなる点がとても良く分かりました。

【講師：一般社団法人とちぎ市民協働研究会

代表理事 廣瀬 隆人 氏】



第4回センター研修「プレスリリースと交渉」

- ・交渉相手を不快な気分させず、目的を達成するために上手に交渉を行う方法を学ぶことができました。また、プレスリリースのお話の際にあった“楽しく”という観点は県民の方々と接する際に交渉に限らず大切なスキルだと感じました。
- ・後半のプレスリリースに関しては、あまり具体的に行動には移せそうなところは分かりませんでした。行政職員向けというよりは、民間企業で活用するような場面が多かったかな？という印象を受けました。

【講師：NPO 法人日本プレゼンテーション協会理事長・国立大学法人東京農工大学 特任講師 高野 文夫 氏】



第5回センター研修兼西北地区研修「協働によるまちづくり」

【講師：やまなしの翼プロジェクト代表
シナプテック株式会社
代表取締役 戸田 達昭 氏】



- ・改めて地域の課題について考えを深めることができ、とてもいい経験になりました。今から実践できることは、是非進んで取り組んでいきたいです。
- ・もしかしたら、自分も何かできるのではないかと、思わせる講師の講義がすばらしかった。
- ・「有言実行！」という言葉が心に響いたので、何事にもチャレンジしてみようと思いました。
- ・「無いからできない」のではなく、「無いならどうやっていくか」という姿勢が求められるのだと思った。

第6回センター研修兼後期新任職員研修「事業計画と評価・改善」

- ・内容としては基本的なことですが、正しく事業評価をすることは事業を実施するにあたって、一番重要なことだと再認識することができました。
- ・基本的な事業評価の手法を学んだ経験がなかったので、今回の研修は大変参考になりました。
- ・社会人20年目にして初めて知ることができ、嬉しいとともに、恥ずかしくもあります。もっと早くに知る機会に恵まれていればと思いました。

【講師：秋田大学大学院
教授 原 義彦 氏】



上北地区研修「地域課題に向き合った社会教育活動」

【講師：青森中央学院大学
経営法学部
准教授 佐藤 淳 氏】



- ・対話を通じた経験学習がいかに重要か、分かったような気がします。今回この研修会で学んで気持ちが前向きになったこと、これを地域に生かしていけたらと思っています。
- ・牧之原市のDVDを使いながらの研修は分かりやすかった。私の住んでいる所では高校生を取り入れた事業が無いので、どんどん取り入れたら町が変わっていくのではないかと思った。
- ・牧之原市の前市長さんの積極的なリーダーシップと首長部局職員の積極的な運営やしかけづくりがこの町の重要ポイントだったと理解しました。

下北地区研修「地域全体で子どもを育む地域活動」

・地域の課題を解決するための方法を具体的に研修させていただきました。今回は子どもの居場所づくりを中心に考えたが、町内会の様々なことに活用できればと思います。

【講師：弘前大学大学院
地域社会研究科
准教授 土井 良浩 氏】



・ワークショップの進め方について学ばせていただきました。今後の業務に役立たせていきたいと考えました。

・子どもが少なくなっている今、子どもが子どもらしく過ごせる場所、時間を提供できたらと思いますので、これからはいろいろな団体と協力して子どもたちのために取り組んでいきたいと思います。

・改めて地域での子どもたちの活動の大切さを感じました。下北の自然を生かした取組が健全な子どもを育む上で不可欠であると思います。

・地域の課題を解決するための方法を具体的に研修させていただきました。今回は子どもの居場所づくりを中心に考えたが、町内会の様々なことに活用できればと思います。

中南地区研修「生きることと教育の本当の意味とは」

・命の根源に迫るお話などがあって良かった。生きる目的を持つことの重要性を考えさせられました。

・生きること、死について、日頃疑問に感じていたことや現在の社会活動について今後の良き指針となった。

・生きることに疲れた方々にも聞いていただきたい内容でした。

・欲を捨て、人のために役立つ人間になれるよう努力して過ごせたら、素晴らしい人生になると思いました。

・今日のお話は、「生きるということと死ということが別のものではない。」ということが参考になりました。生き方の先に死があるのだと、常々思っています。

【講師：恐山菩提寺
院代 南 直哉 氏】



三八地区研修「地域づくりにおけるネットワーク形成」

【講師：むつ市まちづくり
コーディネーター
桜田 真佐 氏】



・私が担当している事業の参考になる講義でした。地元に貢献したい人はいるけど、どのようにすれば良いか分からないという方が多くいるので、私もその方と一緒にイベントを行うなど、活動したりしていければと思います。

・「協働」の原点を感じることができました。まずは、自分たちが楽しむことが大切だと感じました。

・高齢者がよく施設を利用するので、高齢者が子や孫に伝承するようなことをしてみようとカフェの事例を見て思いました。

・むつ市では、コアメンバーがいて、それにまわりの団体・人が協力して協働体制がとれていると感じました。自分たちがまずは地元を楽しむことが大切だと感じました。

自由記述から、受講者のほとんどが、各回のテーマに対しニーズに応じて受講しているため、図3の結果同様、満足度の高い評価・感想を得ることができたと考えられる。また、実務に生かそうとする意欲も感じられる。

一方、研修の進め方や、テーマの捉え方などで運営者と受講者とのギャップがあったり、受講者が予想した研修イメージと違っていたりした場合もあった。

ある地区研修では、「社会教育委員の立場として、地域との連携の在り方の指導などの研修内容にし

たらいいのではないのでしょうか。」といった意見もあった。各々の立場での実務に役立つ研修に求める貴重な意見として捉えたいが、受講対象者が幅広い中で、全てに満足いただくテーマ設定の難しさは否めない。著名な講師による講義の希望の多い中、より実務に役立つ研修のニーズもあることを考慮し、研修内容を計画していかなければならないことを再認識させられた意見でもあった。

2. 市町村教育委員会・公民館施設等 回答編

【対象】

- ①各市町村教育委員会（40ヶ所）
回収率（100%）
- ②各市町村公民館施設等（116ヶ所）
回収率（79%）

【方法】 質問紙郵送法による

【内容】

- ①回答者の属性
- ②当センター主催の職員研修講座への受講状況
- ③当センターの今後の研修内容について希望する構成

- ④当センターの研修を受講するにあたり、障害となっているもの
- ⑤当センターの研修を今後受ける際、重点的に扱ってほしい内容
- ⑥当センターの研修機能として期待すること
- ⑦当センターで配付している研修周知のチラシをどの程度見ているか
- ⑧当センターへの要望

【期間】 平成30年11月1日～11月20日

【問1】 回答者の属性

・貴所属職員の人数を御記入ください。

※教育委員会と公民館施設等が並立し運営窓口が1ヶ所の場合1ヶ所として計算

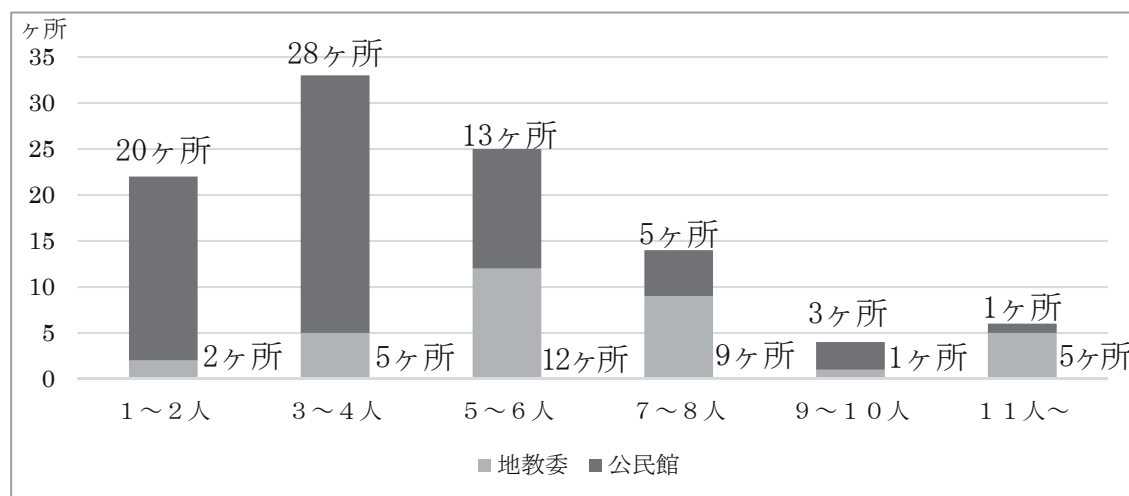


図5 職員数

教育委員会の所属職員は、5～6人の割合が一番高く12ヶ所（35%）、次に7～8人の9ヶ所（26%）と一見職員数は多いように感じられるが、社会体育の分野も含め、生涯学習・社会教育関係職員が担当する業務が多岐にわたって行われているだけで、特別多いわけではないとも読み取れる。それに対し公民館施設等では、3～4人

ヶ所（40%）、1～2人が20ヶ所（29%）と合わせて全体の7割を占めており、極めて少人数で業務にあたっていることが分かる。

また、公民館等の所属人数は1～2名の割合が非常に高いことから、研修への参加の難しさを感じられる。

・貴所属職員の生涯学習・社会教育行政に携わった経験年数（平成30年度10月時点）について御記入ください。

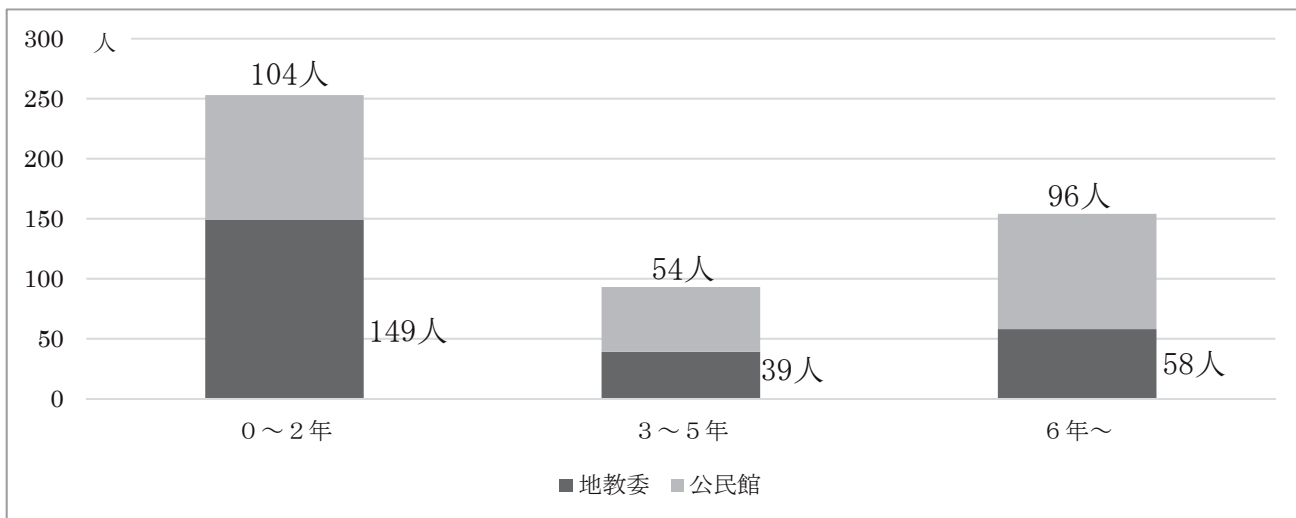


図6 生涯学習・社会教育行政に携わった経験年数

生涯学習・社会教育行政に携わった経験年数については、一番の割合を占めているのが0～2年で教育委員会では60%、公民館施設等では40%、全体で50%となった。次に多かったのが6年以上の経験豊富な職員で、全体で31%となった。

なお、前回の調査（H23）では、0～2年が31%、同じく3～5年が31%、6年以上が29%であったが、今回の調査では、図6のように0～2年の方々が半数を超える結果となった。

【問2】 当センター主催の職員研修講座への受講状況

平成30年度生涯学習・社会教育関係職員研修講座のうち、一度も受講されなかった場合の理由をお書きください。

(地教委)	
◇研修日に他の業務があったため	◇担当事業と重複していたため
◇町の事業、準備等のためなかなか日程が合わない	◇業務の都合
◇会議や当地区の事業と同じ日程になっていたため	
(公民館等)	
☆人員不足のため参加できませんでした	☆人員不足とニーズとの不一致
☆職員の配置数が少ないため	☆1名しか勤務していないため
☆実施時期の人員不足のため	☆通常2人勤務で研修に出す余裕がない
☆職員全員非常勤であり、勤務のシフトの都合上	◇全員非常勤職員で、勤務時間が異なること及び当
☆人員不足	公民館講座等と重複する機会が多く、参加できなかった。
☆研修参加は互いの負担が大きくなる	

- ◇平日実施で勤務時間にあたるため
- ◇開催日程の関係
- ◇日程の都合により
- ◇日程が合わない, または定員がいっぱいだった
- ◇当館の事業と重複して参加できませんでした
- ◇開催時期が公民館の事業と重なることが多い
- ◇企画した講座の開催日と重なったため
- ◇実施日が公民館行事と重なっていたため
- 当市では年3回の公民館関係職員の研修を実施
- 市主催の研修会に参加しているため
- 年3回の公民館関係職員の研修会を開催し, 原則全員が参加し, 研修を深めている
- 市主催の研修と内容が類似していたため
- ※職員が長期休暇のため
- ※業務が多忙なため
- ☆・・・人員不足
- ◇・・・日程重複等
- ・・・ニーズ不足
- ※・・・その他

一度も受講することができなかった理由として各市町村教育委員会からの回答に関しては担当地区の事業が重なっているなど日程的なものが最も多かった。一方, 市町村の公民館等からの回答では, 担当事業の重複の他, 職員数等の人員不足が挙げられた。

その他, 「市主催の研修に参加している」といった回答や「市主催の研修と内容が類似していたため」といった回答も複数あり, 同じような研修内容と予想される研修であれば, 移動に時間のかからない同地区で実施する研修会の受講を優先したと考えられる。

【問3】 当センターの今後の研修内容について, どういった構成を希望されますか。(複数回答)

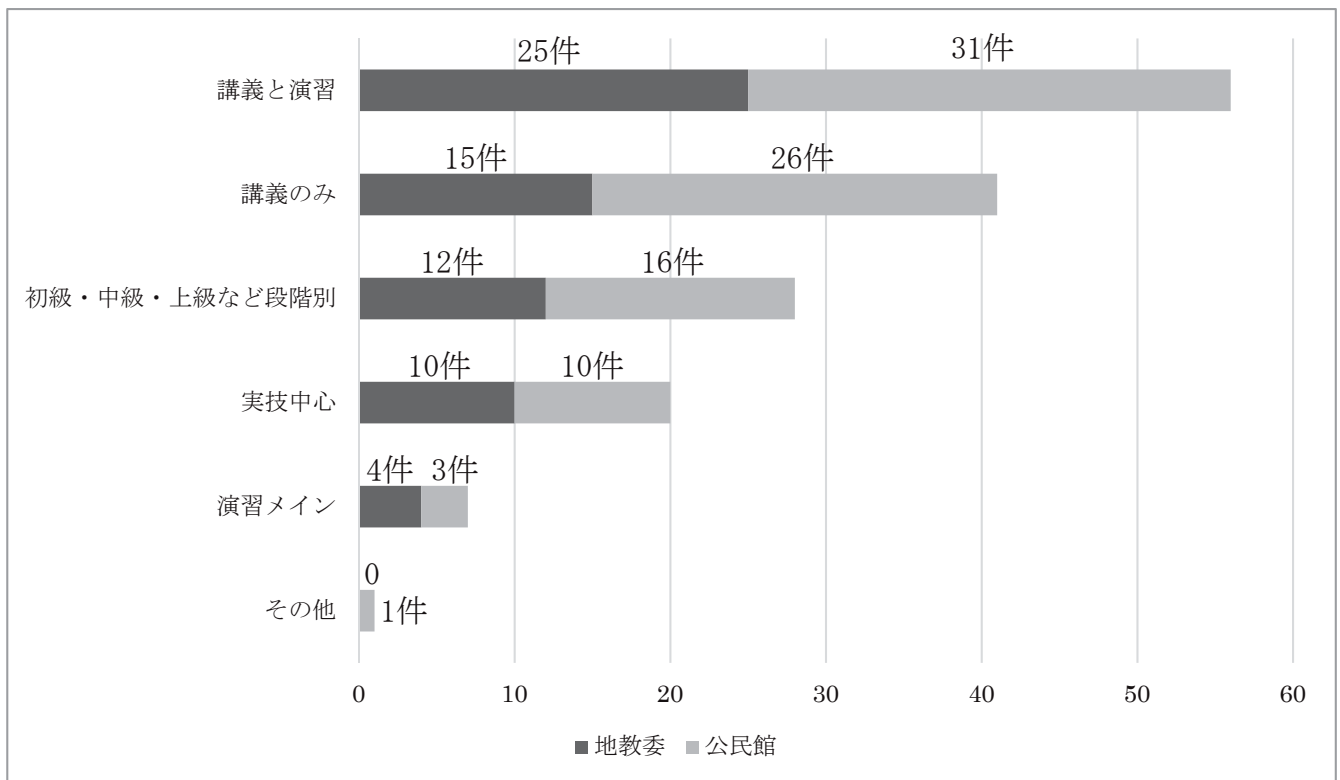


図7 今後希望する研修の構成

今後、当センターが主催する研修において、希望する構成で一番多かったのが、今年度取り入れてきた「講義と演習」の構成であった。次に多かったのは「講義のみ」。以下「初級・中級・上級などの段階別」、「実技中心」、「演習メイン」の順となっている。

研修のテーマにもよるが、講義で学んだ知識を生かし、それを受けて演習を行う「講義と演習」の構成が最も多いのは、実務にどう生かしていくのか演習を通じて学び、より実践的な内容を受講者が求めている表れだと考えられる。

難しい職員にとって、半日研修であれば参加できる可能性があるということも考えられ、最新の情報収集をしたいという積極性が感じられる。

また、今年度研修を受講してくださった方からは「研修の合間や研修後に、講師や他市町村からの情報提供があり、興味深いものであった。」という回答もあり、本講座がネットワーク形成や情報を共有する機会になっていることもわかる。

【問4】当センターの研修を受講するにあたり、障害となっているものを選んでください。（複数回答可）

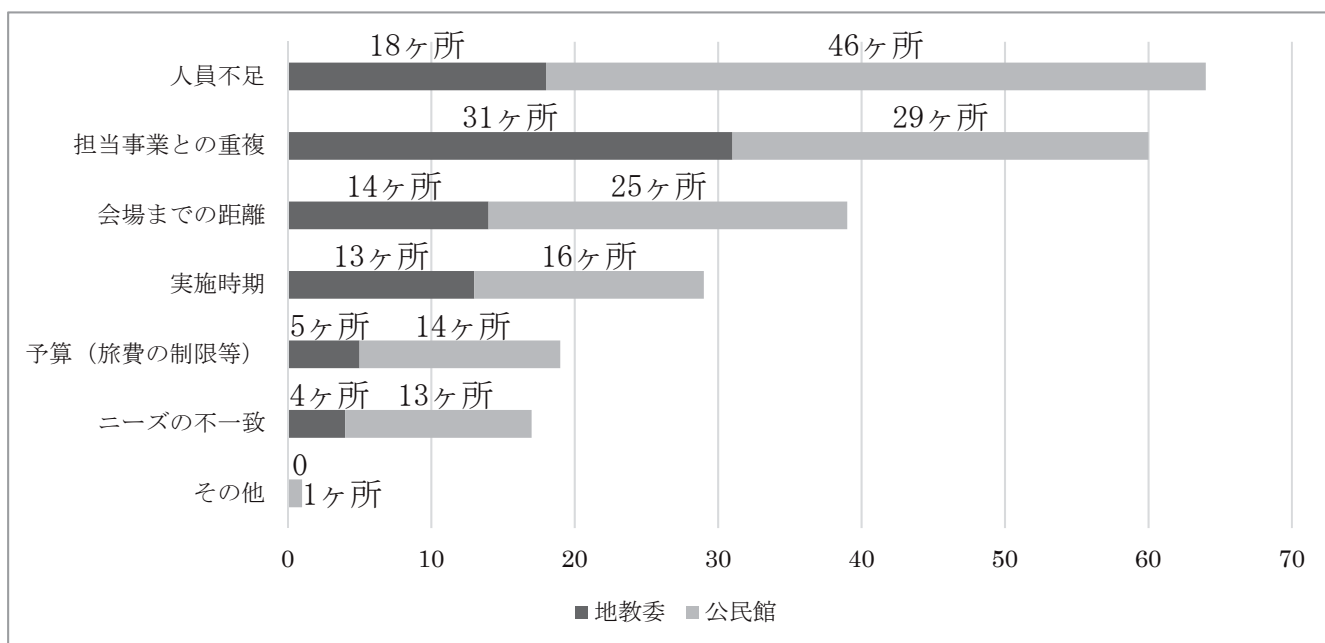


図8 受講するにあたっての障害

当センターの研修を受講する際に障害となるものについての質問で、教育委員会でもっとも多かった理由は、「担当事業との重複」31ヶ所、次に「人員不足」18ヶ所、「会場までの距離」14ヶ所、「実施時期」13ヶ所「予算」5ヶ所、「ニーズの不一致」4ヶ所の順となっている。

教育委員会においての記述では「町の事業や課内事業が多忙であること」を理由として挙げている回答が多く見られた。

一方、公民館等で最も多かったのが「人員不足」46ヶ所「担当事業との重複」29ヶ所と、この2項目で半数近くの割合を占めた。図5及び【問2】

部分でも述べたように、公民館の職員数は教育委員会に比べ非常に少ない。職員数が少ない中で研修を受講することで、他の職員への負担や、自分の担当している業務に影響が出るためこのような結果になったと考えられる。また、「会場までの距離」の割合からは、移動時間を考えると興味があっても遠出ができないという状況にあると考えられる。

【問5】 当センターの研修で重点的に扱ってほしい内容

今後、貴所属職員が研修する場合、特に重点的に扱ってほしい内容はどれですか。(複数回答可)

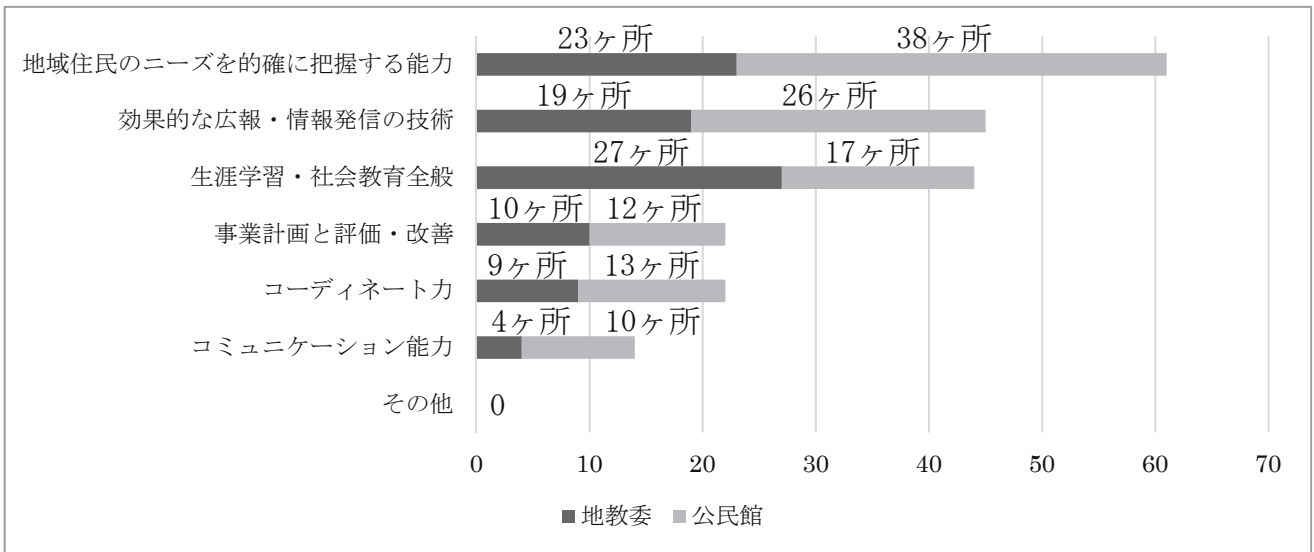


図9 重点的に扱ってほしい研修内容

当センターの研修で重点的に扱ってほしい内容については「地域住民のニーズを的確に把握する能力」(29%)、「効果的な広報・情報発信の技術」(22%)、「生涯学習・社会教育全般」(21%)の順であった。いずれも直接業務に関わる「地域との関わり」

「地域のニーズ」を重視し、今年度の青森県の「社会教育行政の方針と重点」にも掲げられている。「活力ある地域コミュニティの形成に向けた人財の育成」の実現に向けた取組を意識したものと考えられる。

【問6】 当センターの研修機能として期待することは何ですか。(複数回答可)

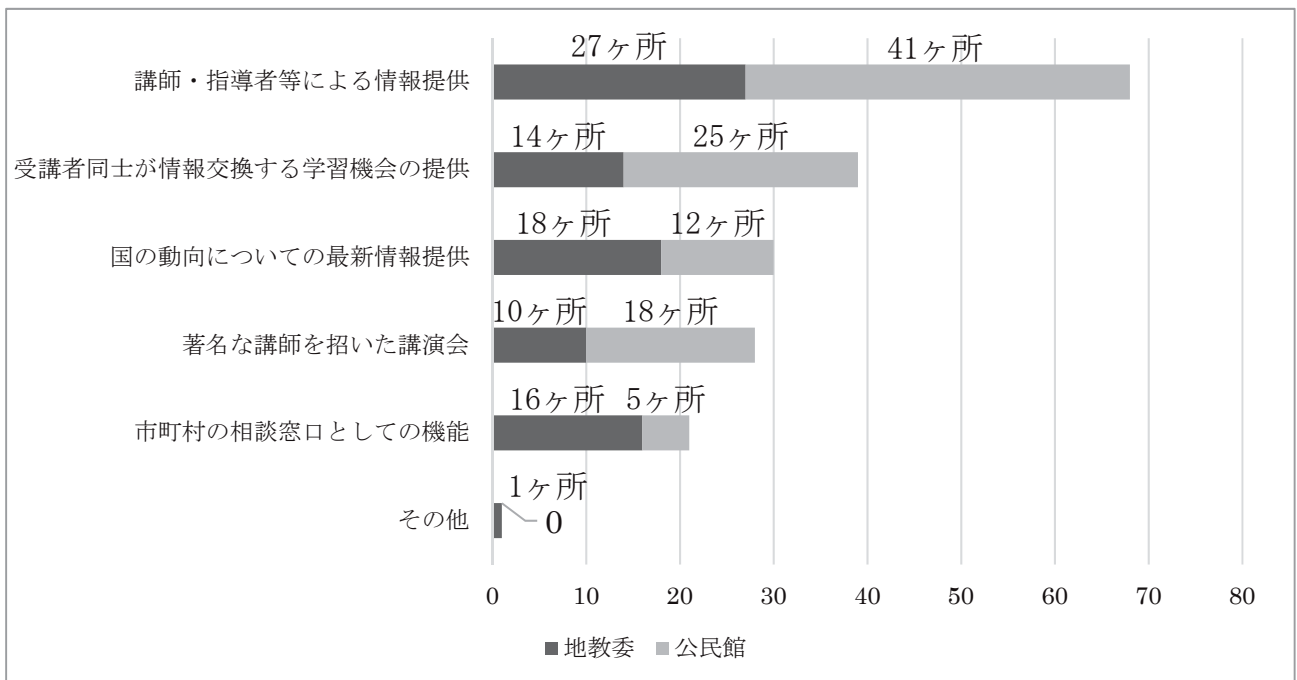


図10 今後期待する研修内容

当センターの研修機能として期待することでは、「講師・指導者等による情報提供」68ヶ所、「受講者同士が情報交換する学習機会の提供」39ヶ所、「国の動向についての最新情報提供」30ヶ所、「著名な講師を招いた講演会」28ヶ所、「市町村の相談窓口としての機能」21ヶ所となっている。

この結果から、各地域における活動実践者のニーズに対応する講師や指導者等の情報提供をするとともに、関係職員が相互に情報交換できるネットワークの構築の場面設定に配慮することが求められている。さらに、相談窓口機能を求める声もあることから、研修を通じたハブ機能も担っていくことも考えなければならない。

【問7】当センターでは、「生涯学習・社会教育関係職員研修講座」の周知用のチラシを作成し送付させていただいておりますが、どの程度御覧いただけていますか。

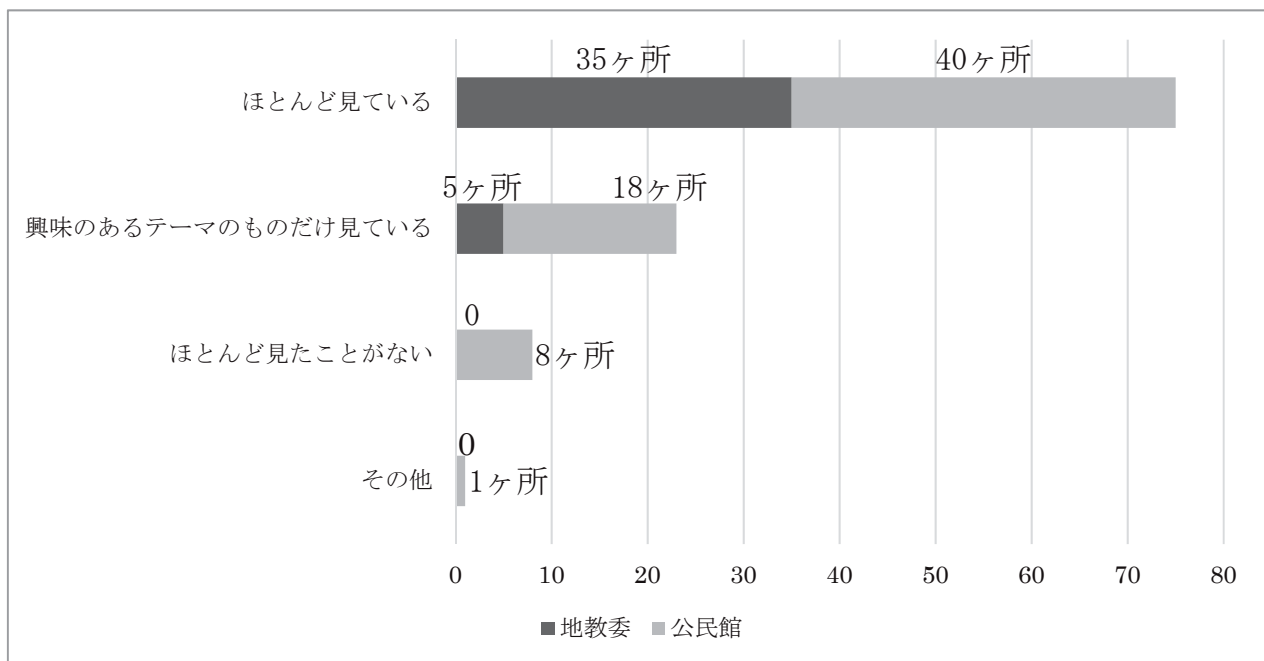


図 11 チラシの閲覧

本講座では毎回周知用のチラシを関係各所に送付しているが、申込締切日であっても、思うように受講者を確保できていない場合が多い。

そこで、どの程度周知されているのかについても調査した。その結果、「ほとんど見ている」、「興味のあるテーマのものだけ見ている」、「ほとんど見たことがない」であった。「ほとんど見ている」の回答は70%と非常に高く、「興味のあるテーマのものだけ見ている」と合わせると9割を超え、周知方法は間違っていないことが分かった。また、「ほとんど見たことがない」と回答した施設は、非常勤1名の勤務であったり、非常勤2名のシフト制の勤務態勢であったりと、いずれも人員不足が原因であった。

この調査から、ほとんどの方々に本講座のチラシを御覧いただき、事業に関して周知されていることが分かった。にもかかわらず受講者が減少傾向にあるのは、やはり「職員の多忙化」と「人員不足」が原因であると考えられる。また、公民館等の職員の回答では「興味のあるテーマのものだけを見ている」との回答が3割近くを占めている。このことから、より実務にあった研修内容にニーズがあることが読み取れる。

今後、チラシの内容をより分かりやすく具体的に表現し、時間の制限される多忙な職員の方々にもインパクトのあるフレーズと研修内容が明確に伝わるようなチラシ作成の工夫が必要であると感じた。

【問 8】 研修講座についての御要望や御意見などございましたら、御記入をお願いいたします。（自由記述）

- テーマが難しく、内容を捉えにくい。具体的で分かりやすい（例えば「プレスリリースと交渉」よりも「講座周知の方法と講師交渉」など）テーマにしてほしい。
- 市単独で研修を実施することが難しいため、大変ありがたく思っております。
- 研修の大半が講義形式ですが、討論形式の研修を希望します。
- 生涯学習・社会教育関係の職員といっても、職務内容に相当の違いが見られる。県内の現状を十分調査した上での研修内容を考え、進めると、本市からの参加が多く期待できると考える。
- 同じような研修講座が他にもある。
- 狭い業界内のみでなく、業務に即反映できて社会でも広く通用するスキルや資格を取得できる研修
- 町内会や単位組織（子ども会等）の合併、組織再編など職員目線で必要性は感じられるが、住民には危機感も動機もなく、停滞や人手不足を招いている現状をどう解消するか。
- 抽象的なテーマの研修名には魅力を感じにくい。高次元の話は住民には通じない。
- 社会教育行政が具体的にどうあるべきなのか、学ぶ機会があると助かります。
- △上半期は事業があり、あまり参加できない。11月～2月の下半期だと参加しやすい。
- △木曜日に集中しているので、変更をお願いしたい。
- △日常業務が忙しく、参加すると人員不足となる。遠方の場合には参加できない。
- △日程が合わない上に多忙。場所（対象地区）が合わない。実施を知らなかった。（告知を見落としました。）内容がほぼ想像できる、または魅力を感じない。
- △事業等と重なり、なかなか参加できませんでした。職員の研修機会も少ないので今後、できる限り参加できればと思います。
- ◇地区研修には是非参加したい。業務の関係で青森市での研修には参加が難しい。地区研修の回数が増えることを期待している。非常勤職員としては研修に出たい。
- ◇社教センターでの開催の他に、県内各地区での出前講座のようなものがあれば参加しやすいかも知れません。
- ◇今年度は全国社会教育研究大会青森大会、大変ご苦労様でした。青森県知事の対談が他県の方から好評を得ていました。我々の県知事の社会教育に対する話を聞いたことがなかったので、是非県のトップである知事の講演を、研修のメニューに組み込んでいただけたらいいなと思いました。
- ◇講師によっては交通の都合で時間に制約があるかも知れませんが、時間があるのでしたら参加者の意見交換の配慮をしてほしい。
- ◇研修の合間や研修後に、講師や他市町村職員からの情報提供等があり興味深いものがある。
- ※研修に参加している方々の名簿を必ず付けてほしい。
- ※他都道府県で同様の研修をどのように行っているのか気になります。仮に同じようにしていたのならば、その良い点、悪い点等興味があります。
- ※年度始めに「研修講座一覧」で確認できますが、周知用のチラシは2ヶ月前が妥当かと思われます。（回覧に時間がかかり、見た時に違う仕事を入れてしまったことがあったから。）
- ※公民館の運営は、社会福祉法人団体との指定管理委託で行っているが、実質、施設管理のみであり、社会教育等の担当職員は配置してない。
- ※生涯学習・社会教育関係事業は、すべて教育委員会、生涯学習課が担当しており、公民館事業としては行っていない。

○・・・研修内容についての意見

△・・・研修の開催日についての意見

◇・・・研修についての要望

※・・・その他の意見

本講座についての要望や意見として様々なコメントが寄せられた。「市単独での開催が難しいため、大変ありがたい」や「地区研修には是非参加したい」「地区研修の回数が増えることを期待している」などの高評価の意見は、各地区の課題解決に向けたテーマ設定で各教育事務所と連携して運営し、より実態に即した研修を構成できていることが要因と考えられる。反対に、今後の課題として考慮していかなければならない意見として、「同じような研修講座が他にもある」や「内容がほぼ想像できる、または魅力を感じない」、「抽象的なテーマの研修は魅力を感じにくい」などがあった。

本講座を周知する段階で、より具体的な講座内容の表現と他の研修会との違いや、当センターが主催する講座として、より先進性や実践を意識したものにしていかなければならないと感じた。今後の構成について貴重な意見となった。

IV まとめ

1 成果

今年度、新任職員研修（前期・後期）、センター研修、地区研修と合わせて全10回の研修を行ったが、センター研修を兼ねる形の研修をそのうち4回設定した。これは、各市町村担当者の多忙化を考慮し、研修内容の精選を考えての試みでもあった。いずれも受講者のアンケートの回答、研修の満足度は90%を超えている。このことから受講する側のニーズには十分応えられたと考えている。

具体的にどういった内容に満足したのかは、受講者アンケートの問3の自由記述の内容からもうかがうことができる。また、今回のアンケートで「十分満足できなかった」や、「ニーズに合わない」という回答に関しては、今後研修内容を考えていく上で貴重な参考意見となった。

特に、今回の研修事業の実施において大きく3つの成果が挙げられる。まず第1回センター研修兼前期新任職員研修では、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター専門調査員による「最新の国の動向」及び「社会教育行政職員として身に

付けておきたいこと」など、具体的な内容を年度始めに説明したことが、新任職員だけでなく受講者にとって有益な情報を得る機会になったと考える。また、他市町村の担当者と情報交換することで、今後の活動のヒントを得たり、自らの事業の見直しができたりと、非常に有意義な時間となったと考える。

次に、実務に即反映できる内容を盛り込んだことである。第2回センター研修では、「チラシづくり」について、第4回センター研修では、「プレスリリースと交渉」についてのテーマであった。どちらも実務には欠かせない内容であり受講者の満足度も高かった。特に「チラシづくり」の研修では、パワーポイントを使っての実践の他に、チラシづくりにおける基本（チラシの善し悪しの見分け方）などの講義もあり、単にパワーポイントの使い方に終わらず、チラシを作る上で、何を強調しなければならないか、レイアウトや色使いなど受講者のニーズに合致した研修となった。また、「プレスリリースと交渉」では、交渉相手を不快な気分させず、目的を達成するために上手に交渉を行う、論理、感情、脅し、駆け引き、譲歩の5つ交渉法を準備し、相手を理解した上で切り出す順や組み合わせの仕方によって、より効果的に交渉を進めていく内容で、交渉に向かう意識など、業務に直結する具体的な内容であった。

3つ目は、「地域学校協働活動」に関する内容を取り上げたことである。

平成27年度12月、中央教育審議会において、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」がとりまとめられた。この答申では、今後の地域における学校との協働体制の在り方について、地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子供たちの成長を支え、地域を創生する「地域学校協働活動」を推進すること、そのために従来の学校支援地域本部における地域と学校の連携体制を基盤に、新たな体制として「地域学校協働本部」を全国に整備することや、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の一層の推進を図るため、制度面・運用面の改善や、財政的支援を含めた条件整備等の方策を総合的に講じること等が提言されている。

このことを受けて、各市町村でこういった形

で「地域学校協働活動」を進めていくのか、また、既に行っている地域ではどんな取組を行っているのかなど、非常にニーズの高いテーマとなった。

今回、地域活動において、全国的に著名なとちぎ市民協働研究会代表理事 廣瀬隆人氏を講師にお招きしたところ、定員を超える受講申込みがあった。

この第3回センター研修兼東青地区研修のように「地域学校協働活動」を軸にしたこと、また、市町村地域課題検討会（図2参照）を地区研修に統合したことで、教育事務所や市町村の負担の軽減を図った結果であることを成果として捉えたい。

また、生涯学習・社会教育関係職員にとってニーズに合った内容であれば、多くの参加を見込むことができる今回の調査の裏付けとなる結果となった。

2 課題

今回の調査から、より多くの市町村の社会教育関係職員に本講座を受講してもらい、当センターが県のセンター機能を更に充実させるためには、次のような課題について今後検討していかねばならないと考える。

(1) 研修実施の時期

市町村教育委員会・公民館施設等を対象としたアンケート【問4】の「当センターの研修を受講するにあたり、障害となっているもの」の回答として、教育委員会で最も多かったのが、「担当業務との重複」であった。公民館等においても「担当業務との重複」は2番目に多かった。市町村教育委員会主催の主たる行事やイベント、研修会、また公民館主催の行事等の日程が決まる前に本講座の日程を確定させ、早めに「研修講座一覧」を配付するなどして、各市町村に可能な限り日程調整していただけるよう努めることが必要である。

(2) 研修内容の精選

同アンケート【問2】今年度一度も受講できなかった理由では、次のような回答が見られた。

- ・当市主催の研修会に参加しているため。

- ・当市では年3回の公民館関係職員の研修会を開催し、原則全員が参加し、研修を深めている。

- ・市主催の研修と内容が類似しているため。

各市町村教育委員会、公民館等の当該地域においての研修は、移動距離、旅費等を鑑みても当センターの研修に比べると受講しやすい環境にあることが分かった。以上のことから今後本講座を行う上で配慮すべき点として、次のことに留意していきたい。

- ・市町村として行っている研修と内容が重複しないようにする。

- ・本講座を運営する際、各市町村の担当者が情報交換できる研修内容にする。

- ・センター機能を生かし、各市町村へ国の最新の動向や、著名な講師を招いた全国的な流れを伝える研修内容とする。

今回の調査での当センターへ期待する研修内容や講座を受講できなかった理由から、今後研修内容を設定していく上で、「質が高く、わかりやすい、さらに実務としてすぐに取り入れられるもの」など研修内容の精選について検討を要することが明らかになった。

V おわりに

今回、講座ごとのアンケートに加え、市町村教育委員会、公民館施設等の職員を対象に「生涯学習・社会教育関係職員研修講座」についてのアンケートを実施し、今後の本講座の在り方について調査を行ったことは、その方向性を考える貴重な機会となった。

当センターの研修機能として最も期待されているのが「講師・指導者の情報提供」であった。

これまで、「研修講座一覧」を用いて講師等の情報提供を行ったり、問合せの相談に乗ったりしていたが、いわゆる窓口的な役割もより積極的に担っていかねばならないことを強く考えた。加えて市町村だけでは依頼することがなかなか難しい講師を、本講座の講師とすることにより、講師や指導者の情報を提供することも含め、今後とも講師情報を広く提供していくことが必要であると感じた。

受講者のニーズだけではなく、国の最新の動向

や情報、県として伝えなければならないことをしっかりとした必然性を持って伝えていくことはセンター機能として重要な役割であることも再認識した。

平成29年5月に一部改正された社会教育法第5条第2項において、「市町村の教育委員会は、前項第13号から第15号までに規定する活動であって地域住民その他の関係者が学校と協働して行うもの（以下「地域学校協働活動」という。）の機会を提供する事業を実施するに当たっては、地域住民等の積極的な参加を得て当該地域学校協働活動が学校との適切な連携の下に円滑かつ効果的に実施されるよう、地域住民等と学校との連携協力体制の整備、地域学校協働活動に関する普及啓発その他の必要な措置を講ずるものとする。」と明記されている。

青森県の「平成31年度社会教育行政の方針と重点」では、重点項目（1）「学校・家庭・地域の協働による未来を担う人財の育成」の最上位には、「地域学校協働活動の促進」が位置づけられた。「地域学校協働活動」は、本講座でも重要視されるキーワードとなることから、各市町村の課題解決に向けた研修テーマには、様々な地域づくりの事業と関連性を持たせ、各回の講座の内容の差別化と明確化を意識し運営していくことが今後のセンターとしての重要な役割となる。

当センターは県における社会教育の中心的な役割を果たしており、本講座の構成に変更を加えるなどしながらこれまでも工夫を重ねたり、最新の情報の提供をしたりしてきた。また、生涯学習・社会教育関係職員及び関係団体職員等の資質向上を目指し研修を行い、ネットワークの形成も図ってきた。

今回の調査結果は、受講者のニーズの把握とともに、市町村の現状や業務上の課題を知る上でもとても貴重な機会を得た。一見、新学習指導要領の改訂と全面実施については、「学校教育」の領域として捉えられがちだが、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた「地域学校協働活動」の推進については、まさしく「社会教育」の“真骨頂”であり、その役割は非常に大きなものであることは間違いない。「人づくり」は「地域づくり」。学校を核とした様々な活動が、家庭教育ともつながり、未来を担う人財を育成し、「今ある人財」「今

ある資源」も大いに活用されることになる。

各市町村において社会教育行政関係職員は貴重な存在であり、その責務も大きい。

当センターは、その貴重な人財に対し、正しい情報を伝え、さらなるスキルアップ（資質向上）と学び（研修）の場を提供し、「学びを生かしつながりをつくり出す社会教育の推進」を目指し、今後とも研鑽に努めていきたいと考える。

<引用・参考文献>

- ・中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」（平成2年1月）
- ・青森県教育委員会「平成30年度社会教育行政の方針と重点について」（解説）
- ・当センター研究紀要第23号「今後の生涯学習・社会教育関係職員研修講座の在り方についての一考察」
- ・青森県教育関係者必携（平成30年度版）

ISSN(International Standard Serial Number)
とは、膨大な刊行量をもつ逐次刊行物の的確な把握と情報処理、流通の円滑化、利用の促進を図る必要から個々の逐次刊行物に与えられる国際的な識別コード番号のこと。

研 究 紀 要

第 30 号

平成31年3月 発行

編集・発行 青森県総合社会教育センター
〒030-0111 青森市荒川字藤戸 119-7
Tel 017-739-1252 Fax 017-739-1279
<http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/>
E-mail : E-SHAKYO@pref.aomori.lg.jp
(印刷 青森コロニー印刷)

この印刷物は600部作成し、印刷経費は1部当たり233.2円です。

